

あ、前線で戦うとか無理なんで偵察してきますね。

喪家の狗

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

おい、どうなったんだ。

なんかここ4・5年で魔王城に攻め込んでくる勇者たちがすげー増えた気がすんだけど…。

しかもほぼ全員がチート級のスキルだったり、伝説の武器持ってるし！

もう少し控えめに！ 神様!?! 居るならちゃんと仕事して!?!

鼻で笑える程度の作品目指してます。良ければ見て行ってください。
い。

拙作は「小説家になろう」様にも同時投稿させてもらっています。

目次

ハーレム勇者編

勇者と愉快な仲間達それと…	1
最強の最弱	6
『魔王』の一端	10
可愛いペットを拾いました 1	15
可愛いペットを拾いました 2	25
健やかなるときも…	30
誰でも簡単！朝食レシピ	34
A Full New World	41
勇者との旅	46
勇者と水浴び	52
勇者との冒険	59
勇者との絆	64
勇者と蝙蝠	70
勇者と攻城	78
勇者と罰	83
勇者と愉快な仲間達それと蝙蝠	90
勇者と初めまして	96
勇者と久々冒険	104
勇者と修行	114
勇者対魔王軍 真剣勝負	121
幼女と和解せよ	128
勇者との決別	134
なっかなおりーのおまじないー	148

ごめんなさいと…

魔王までの道

勇者と魔王 1

勇者と魔王 2



ハーレム勇者編

勇者と愉快的な仲間達それと…

「カンパーイ!!」

賑やかな酒場にグラスを重ねた音が鳴り響く。

「勇者様く、今日も凄かったよ」

そう言ってくれるのは魔法使いのリリカ。

魔法使いらしい黒のローブに三角の帽子。どこか魔女を彷彿とさせる格好だが、特徴的なピンクの髪の毛のせいで魔女のそれとは遠く及ばない。

背は小さいものの高い魔力を保持していて、彼女の放つ1撃は凄まじい。

「はい、流石勇者様です。今日もお疲れ様です」

リリカと同じように褒めてくれるこの子は、弓使いのシイノ。

薄緑の綺麗な髪から見える長い耳が証明するように彼女はエルフという種族だ。

まだ奴隷だったころの癖が抜けきっていないのか今のも敬語で話すものの、常に仲間のことを最優先で考えられる子だ。

「ふふくん、そりゃそうよ。なんてったってこのアタシが見込んだ勇者なんだから!」

胸を張り自慢げに言う彼女は神官のミサ。

青と白を基調とした正装は赤い髪の毛の彼女とは合っていないが、彼女なりのアイデンティティとして今ではしつくり来ている。

突然僕の前に現れ、「アンタ、今代の勇者だから。さ、魔王を倒しに行くわよ！」と言つてきてからというもの、僕の人生は一転し仲間と共に魔王を倒す旅が始まった。

「み、みんな褒めすぎだつて…。」

そして彼女たちの話題の中にあり、パーティーリーダーでもある僕、勇者のトウヤ。

僕らのパーティー『ナマノトリニク』は、今日も打倒魔王を目標に掲げ、朝から夕方までダンジョン攻略に勤しんでいた。

ダンジョンとは定期的に魔物が産み落とされる洞窟のことで行くほど強い魔物がたくさん出てくる場所のことだ。

そこと魔王軍は関係ないけど、多くの冒険者たちからレベルアップには最適と聞き僕らもそこに通うようになった。

そしてこの俺！ 長つたるい勇者様御一行の紹介を最初から最後まで聞かされた偵察蝙蝠のハツカ。

今日も今日とて今代の勇者の行動を監視し、魔王様及び俺の上司に逐一報告してるのだー！

天井と壁の隅にぶら下がってる蝙蝠おれは、バツつと翼を広げた。(激うまジョーク)

はっ、勇者め！ まさか暢気に話してるこの瞬間も魔王軍の目があるとは夢にも思いうまい！

… あ、蝙蝠だから視力はそんなに良くないけど。

… … うん、耳だな。耳にしよう。

まあ、視力の云々はあるものの、その隠密能力は魔王軍トップクラス。(当社比)

過去に数々の偵察任務をこなして来たけど、バレるなんてハマしたことは一度もない。

「あく、シロちゃんまた来てるよ〜」

「あらホント。最近よく来るね」

(あ、ホントだ。今日も来てる。最近よく見かけるけど何処の子なんだろう。誰かの使いかな?)

ちっこいのが俺の近くの席を指さした。

む、シロちゃんって誰だろ。新しい勇者パーティかな。

…まだ増えるのかよ、勇者ハーレム。

からだと見えないけど、恐らくほかの客の中にシロちゃんたる人物がいるのだろう。

「ご飯食べるかな〜? ね〜ね勇者様、パンあげてみてもいい?」

「ん? ああ、良いんじゃない?」

——不意にパンくずが飛んできた。

…!

だが俺は回避にも長けているからね。そう簡単には当たらない。パンくずはコロコロと床を転がった。

おいこら、食べ物を投げるな。マナーが悪いし、命中も悪い。手で渡せばいいだろ。

少しびつくりしたじゃないか。バレたのかと思ったよ。

「あれ、やっぱり食べな〜い。パン嫌いなのかな〜？」

「お腹すいてないのかしら。あ、トウヤ。次の作戦についてなんだけど…。」

話を盗み聞き、床に落ちてしまったパンを齧った。

ん、これ凄くおいしい…。

(んー、これからの作戦か、どうしよう…。)

さつきから勇者の思考が読み取れているのは、音ならざる声、つまり心の声を特定の状況下で聞くことができるという蝙蝠系の魔物なら使える能力によるもの。

(そんな僕達だが今は1つ目の目標、魔王城西支部の攻略を目の前にしている。)

対象が1人だけだったり、敵対してない奴には使えないとかいろいろ面倒な制約があるけど、中々に便利な能力だ。

(パーティー名である『ナマノトリニク』は、国王様から授かったもので、『気を付けろ』って意味だそう。ふふ、魔王軍に対する警告を掲げてるみたいでかっこいいな。)

…おい。ずっと監視してて思ったんだがお前心の声すげえうるせーのな。

よくぞ食べながら仲間たちの会話を聞きそれに答えながら現在進行で思考を乱されないな。

(僕の好きな食べ物はニンニクとパクチー、それから…)。

おいて。関係なくなってきたるだろ。それだったらさつきみたい
に有益な情報を垂れ流せよ。

☆☆☆

「ふわ〜…。勇者様あ〜ボク、もう眠いよ〜」

「おっと、もうこんな時間か。それじゃあ、そろそろ宿に戻ろうか」

「ええ」

「はい」

おや、宿に行くのか？ しょうがない、寝る前に何か話し合うかも
しれないから付いてくか。

もう既に結構遅い時間だったようで勇者たちは会計を済ませ店を
出た。

勇者がちっこいのおぶって、その後ろに2人の女が続く。

そのまま一行が寝泊まりしてる宿屋へと入っていった。

俺もバレないようにそれに続き、部屋の屋根裏に忍び込んで聞き耳を

立てた

――― 後、聞きに行かなければ良かったと後悔した。

… ハーレムパだもんね。しょうがない、しょうがない。

このことも報告したほうがいいのかな？

最強の最弱

偵察蝙蝠と言ってもずっと偵察してる訳でも無い。

次の日の早朝、魔王城に戻った。

魔王城、と一口に言っても正確には魔王城は5つ存在する。

魔王城支部と呼ばれる東西南北それぞれの名の付く4つの塔城と中央と呼ばれる魔王城、これが本殿。

4支部全てを落してからじゃないと中央には入れないらしいのだが、どうやったらそんなシステムになるんだろ…。

多分あれだな。カギとなるアイテムが必要なんだ。オーブとかそのまま鍵だったり。きつとそうだ。なんかの文献で読んだことあるもん。

魔王城(うち)の製作部は凄いからね。この前見せてもらった『セーぶぽいんと』は凄かった。

そんな各支部には魔王軍最高戦力の団体、『四天王』がそれぞれの担当支部で待ち構えており、やって来た勇者たちを葬り去っている。

俺は人間の姿に化け、そんな『四天王』様に挨拶をする。

「お疲れ様です。今戻りました」

「よお、ハツカ。今回の偵察もご苦労さん」

『四天王』の1人であられるこちら、我らが西支部担当リザードマンの『サイジャク』さんだ。

四天王とは言わば監督責任者で、各支部四天王の指示で自由に行動することが許されている。

勇者たちに仕掛ける攻撃も自由なので、自ら敵地に赴くところもあれば近くに來てから応戦するところもある。

魔王様的には拘りがあるらしく、

「城で戦ってこそが魔王戦」

という言葉があるほど。

つまり魔王様は待機推奨ということなのだが、

「っしやいくぞ〜〜!!」

「!!」おおおおおおおー!!」!!」!!」

西支部は血氣盛んらしい。

改めて今回の偵察によって手に入れた情報を報告するとサイジャクさんはやる気になっていた。

それもそのはず、如何なる姑息な手を使おうと、勇者を捕獲・無力化したものには報酬が出ることになっている。

それが中々に旨いらしく、通常給料の約5倍は出ると聞いたことがある。

なので未熟なうちにヤツてしまうのが理想。

無力化なら殺してもいいのか、と言われるとそうではない。

実はこの魔王軍、『無益な殺生はしない主義』を企業理念(?)に掲げている。

… 魔物の王としてそれはどうなんだ？

「お前らー！ 準備はいいかー！」

意気揚々と虫取り網を振り回してるサイジヤクさんが言った。

「いつでも良いですぜ、兄貴！」

鋭い槍を持った兵士が言う。

「おう！ あの生意気な勇者の身体を叩き斬ってやりますよ！」

赤い液体の付いた大剣を嬉しそうに眺めた兵士が言う。

「へっへっへ…。俺様のこの毒武器でアイツを亡き者にしてやりましょう…」

毒が大量に塗られた投げ針を舐めたのか、倒れてる兵士が言った。

他にも大勢のやる気、否、殺（や）る気の声が上がる。

… この人たちは殺す気満々ですけど、今回の作戦内容ちゃんと頭に入ってるんすかね。

「よーし、それじゃ…」

あ、良かった。ちゃんと作戦の確認するのか。

「明日に備えて今日は早めに寝ろよ！」

「「「へっへっ！」」」

「解散!!」

しないのか。

「お、おおくく…。」

毒武器兵はまだ倒れてた。

『魔王』の一端

「最後まで生き残った奴が勝ちなんだ。

どんなずるい手を使っても、どんな惨めな姿で帰ってこようと死にじまつたら何も残らない。

だからいいか？ 無理だと思ったら形振り構わず一目散に逃げろ。まずはそこからだ。

そして余裕が出来たら他の奴を助けるんだ。共倒れなんて面白くないから必ず余裕が出来てからだ」

「な、なるほど……。サイジャクさん、流石っす」

戦場知識を教えてくれてるのは魔王軍最強の幹部部隊、四天王の『サイジャク』さん。

この人は戦闘経験も豊富なので知識の浅い俺に心得を教授してくれたり、困ってる時に相談に乗ってくれたりする非常に頼れる上司様だ。

今日はこれから勇者戦があるにも関わらずこうして戦闘の何たるかを微塵も知らない俺に教えてくれてる。

「さ、サイジャクさーん、こっち準備できました。いつでも出れまーすー！ーううえお」

未だ毒の抜けきってない兵士が呼びに来た。

「おっと、そろそろ行かねーとだな。しゃーね、いつちよ行ってくるわ」

「あ、はい！ お気を付けて」

「おう！ 俺の戦い方、特とご覧あれあれだ！ 行くぞ、おめーらー！ー！ー！！」

「『よいしょーーーーー!!!』」

その日、サイジャクさんが戦死した――

☆☆☆

「サイジャクさん…。」

ここは魔物の魂、『ソウル・コア』が眠る場所、『仮眠室』。死んでしまった魔物は皆ここに還る。

先ほど報告のあった、サイジャクさん一行の全滅からすると皆ここに還ってきたのであろう。

周りを見渡すと何個もの魔石がキラキラ輝いている。

俺は『サイジャク』と書かれた魔石を前に1人で床に座った。

今はこの魔石も綺麗な青の光を放っているが、あと数時間でこの光も消えてしまう…。

☆☆☆

時間が経ち、さつきまで各所で光っていた魔石ももう残りサイジャクさんの分1つとなってしまう。

その光が消える最後まで見つめていると――

「ん？ ハツカ。どしたんだ？」

——サイジヤクさんが魔石から出てきた。

「サイジヤクさん」

「おう？　なんだなんだ？　出迎えてくれたのか？」

「はい、戦死したって聞いたんで。大丈夫でしたか？」

「おう！　今は何ともねーよ。ほれ、ピンピンしてる」

腕をグルグル回して大丈夫アピールしてる。

脚もぎ取られたって聞いたけど…？

「…そですか。よかつたつす」

「心配かけたな。だがこれも魔王様のおかげだな」

魔王様の固有能力【ソウル・コア】。

魔物と契約することでその魔物の核である魔石を『ソウル・コア』として取り出すことができる。

本人と『ソウル・コア』が一定距離離れると死んでしまうなんてことは無い。

馬鹿じゃないからね。

… うん、固有魔法だよ。ほら、よくあるでしょ？　持ってるのと自体珍しいとか、そいつオリジナルとか、よく設定とかにも使われるでしょ？　あれだよ。

俺の【心の声を聴けるやつ】も蝙蝠系の魔物の固有能力だったりする。

… そういえば。

「あ、その魔王様なんすけど…。」

「おう」

「ここに来る途中にお会いしまして…。」

「…おう」

「『サイジャクが目覚めたら話がある。伝えておけ』だ、そうです…。」

「お、おう…。」

いくら魔王様とはいえ無から何かを生み出せるわけではない。

当然魔物を蘇らせるのにだって当然それ相応の『魔素』を消費するわけでその『魔素』もまた無限ではない。

四天王クラスにもなると当然他よりも『魔素』が必要となり、大量消費すると当然…。

「ハツカ、出迎えてくれてありがとな…。」

『仮眠室』とはメンバーの『ソウル・コア』を保管する場所で中央の魔王城にあり、常に魔王様が護っている。

「あ、はい」

これを壊されると復活できなくなるだけでなく本人も死んでしまう。

とても重要な施設故に魔王城最強の魔王様が護ってるわけなのだが、

「先、戻ってきてくれ…。」

なぜ仮眠室と最後の間が繋がっているか。単に魔王様が護っているというのもあるが、仮眠室から出るためには魔王様と必ず会うことになる。

「はぐ…」

——その日からしばらくサイジヤクさんの元気がなかった。

可愛いペットを拾いました 1

「じゃ、俺そろそろ行くわ」

サイジャクさんから偵察しごとを頼まれたので、遊んでいた同僚の部屋を出て向かおうとする。

「あー、おい、ハツカ」

部屋主兼同僚に呼び止められた。

「ん、なに？」

「今日、半人半魔、いるから、ひろって、きて、くれないか」
「拾うって…」

半人半魔。

人間と魔物の混種。たまーにいるんだけどこれが大変だね。片親が完全な魔物だから人間側から嫌われていて、人間とか言う劣等種wwって感じの魔物側からも嫌われ(?)てる。
…のか？

うん、どっちからも嫌われちゃうんだよね。

そんな親の都合など知らないながらも、半人半魔としてこの世に生を持ってしまった少女がいた。

魔王城西支部からある程度近い位置にある人間の国、ドツイ。

その子はドツイのとある街の食堂でうまく姿を隠しながら生活で生きていた。

半魔と言えど、外観は人間とさほど変わらず、せいぜい髪の色が白黒で半々に変われているくらいだろうか。

なので賢い少女は自分の白髪を墨で黒く塗った。

試しに水を掛けてみたが、墨が落ちることは無かった。

これで大丈夫だろう。安心だ。

だが残念、賢くても不測の事態には対応出来なかった。

酔っぱらって周りに麦酒を振り撒く客と、偶々浴びてしまった少女。

炭酸によって落ちる墨と、露わになる特徴的な白い髪。

疑惑と困惑。

逃走と追跡。

——気付いた時には、捕まっていた。

☆☆☆

私は食堂からすぐに逃げ出した。

追いかけてくるのは武器を持った冒険者さん達。

私は、殺されてしまうのだろうか……。

魔物として処理されてしまうのだろうか……。

そんな未来を変えるように走る。

走る。

とにかく走る。

だが現実とは非情なもので、たどり着いてしまったのは細い路地裏。

行く先は何処も行き止まり、体力ももう限界。

もう、無理……。

そう諦めたとき私は、

——捕まった。

「……お、みつけ」

否、

「つかま——えたっ！ ……って、ええ!?! な、なんで泣いてんの!?!」
捕まえてもらった。

☆☆☆

あーあー、なんか大変なことになってんのな。

い。今日も今日とて勇者の偵察だったのだが、どうやら様子がおかし

勇者の思考を読み取り、理解した。

ちきしょう、アイツめ。こうなることが分かってんならもっと分かりやすく言ってくれよ。

………しょうがない。

☆ ☆ ☆

街中を飛ぶ。

目が悪いのに大丈夫なのかと思われるかもだけど、超音波の跳ね返りとかで把握できるんだよね！

超便利ー！

おっと、街中を飛ぶのは楽しいけど目的を忘れちゃダメだ。

…

…

おし、捉えた。

早速現場へと向かい、保護する。

☆ ☆ ☆

「…どう？ 落ち着いた？」

「…はい」

…よかったあー。

捕まえた途端泣き出すもんだからビックリしたよ。

今の声でバレてないかな。

…大丈夫？

話を聞いてみると俺を見て殺すのかと思ったらしい。

失礼な。確かに空から人が降ってきたら勇敢な少年以外は皆ビビるだろうけど、俺は虫も殺せないような弱っちい蝙蝠やぞ？

泣かれたままも嫌なので宥めていると、もうあの店には戻れない、と呟いていた。

そうか、なら都合が良い。

「行くところ無いなら魔王城来る？」

「…え？」

てことで勧誘してみた。

いやね、今魔王城では、新たに魔王様と契約した人と、その人を勧誘した人に特別な物が貰える『きゃんぺーん』？ てのを開催してるらしくて、それ目当てであろう同僚に頼まれて連れて来いって言われてたんだよね。

何とか言い包めようと努力する。

「街じやあ白髪は目立つだろうけど、魔王城じやもつと色々いるからね」

証明させるように蝙蝠の姿へと成る。

「え、蝙蝠…？…なんで、白いんですか？」

ふっふくん、それはね〜？

人間の姿へと戻り、説明しようとして気付く。

——誰か来る!?

まずい、注意を怠った。

急いで移動しよう。

「ごつち…!」

「…え」

「…待ちな!」

やっべ! 気付かれた!?

恐る恐る振り向き、苦手な戦闘を——

…って思ってたけど普通の女性だ。

「お、女将さん…」

女将さん?

あー、この子が働いてた食堂の…？

な、なんだろ。その子を渡せとかかな？

この子が働いてた店ってことで景気が悪くなるのを恐れ、見せしめとしてこの子を殺s… おっえ。

想像しただけでおえってなった。

「やっぱり、アンタ半人半魔だったのね…」

む、ホントにその可能性出てきたな。

この子を守る意思表示として軽く抱き寄せる。

「んっ…」

不意に顔が赤くなる少女。

え、も、もしかしてピンチから救ったことによる謎の女の子惚れ状態…!?

… って無知な頃の俺なら思ってたんだろーな！

これはきつとこの前勇者が言った『吊り橋効果』って言う名前の呪いだろー。その呪いのせいで俺に好意を抱いたと錯覚してるのだ。

危ない危ない、勘違いするところだったぜ…。

「… その様子なら大丈夫そうね」

今のやり取りを見てた女将さんがポケットから何かを取り出す。

あ、あの！ 今の俺に堕ちたわけじゃ無いですからね!? 俺にまで勘違いさせようとしなくてくださいーい！

そう思ってる間に取り出されたのは金色の薄い円盤型の殺人道具だった。それをこちらに向け…!?

あ、ああ、なんだお金か。

取り出されたのは中々の量のお金が詰まった袋だった。

「ほら、退職祝いだよ。アンタ、親がないのによく今日まで頑張ったね」

話を聞くとこの子は両親がいないがために無理言って住み込みで毎日遅くまで働いていたらしい。

その際、住ませてもらってるからってことで給料の半分を女将さんに渡していた。

で、そのお金は女将さんが使うことなく大事に保管されていて必要な時に渡そうとしていたと…。

この女将さんは何回かこの子の白髪を見、半人半魔ではと疑いながらも住まわせてくれたと…。

あー、ダメだ。

こんな時に言っちゃアレだけど、すげーベタだ。ベタなんだよ。だけどなんだ、この感情は…。

やっぱベタだけど現物で見るとなんか泣きそうに…。な、泣いてないけどさ…。？

「それじゃ、私の役目はこれまでだよ。白い兄ちゃん、アンタ…。泣いてんのかい？」

な、泣いてないって…。

「ま、まあ、兄ちゃん。この子をよろしくね。いい子だから」
「あ、ああ」

泣いてるから声がうまく出ない。泣いてないけど。

「顔もなかなか可愛いし、傷物でもない、何なら処女だよ」

最後の言わんくて良くない？

女将さんが人気のない道に案内してくれる。

それに付いていくと街の外まで出れた。

「ありがとう、助かった」

「良いんだよ。それよりもその子、よろしくね」

少女が手を握ってくる。

「わかった」

どうやら決心着いたようだ。

「…行くよ」

「はい」

「…女将さんに挨拶しな？」

「女将さん、今までホントにありがとうございました…」

「良いんだよ、私も娘ができたみたいで楽しかったからね」

「…うん」

「白い兄ちゃんの言う事よく聞くんだよ？」

「…うん」

ホント良い人だなこの女将さん。唯一好きな人間だよ。

女将さんに別れを告げ立ち去ろうとする。

「…今度こそ、幸せになりなさい」

魔王城に着いた頃には目が真っ赤になってて門番の人にすっげえ笑われた。

可愛いペットを拾いました 2

「… っことでこの子勧誘してきました」

「いや、ダメですよ？」

「あれ？」

「悲報。ダメって言われた。」

魔王城へと戻ってきた俺は依頼人の同僚にこの子を届けたんだが、
「あ、すまん、やつぱ、いらん」

っって言われたから完全に情が沸いてしまった俺が引き取った。

なんだよアイツ。無責任にもほどがある。拾ったら最後まで面倒
見るのが飼い主のあるべき姿だろ。

…ん？ 拾ったの、俺か。

っことでね、ここで働かせてもらうために新人雇用なんちゃら係
の人とお話をしていたんすよ（名前忘れた）。

「え、あー、あの今って新人雇用強化期間中ですよね」

「ええ、そうですよ」

「だよね、良かった…え、じゃあなんで？」

「何でも何も…その子、戦えるの？」

「あ…」

た、戦えるのか…？ この子が。

…いや、流石に無理でしょ。

チラリとみると食堂から逃げ出せたのが奇跡というくらいの体型をしている。

手足は細く、身体もあまり大きくない。とてもじゃないけど戦っても無駄死にするだけだろう。

今から鍛えても、ねえ。

「ええくと…… あ、じゃあペット、ペットです！」

「は？」

「あ、あのー、契約は無しでもいいですし、ちや、ちゃんと面倒も見ますし、ご飯もあげます。散歩にだって毎日……」

「え……。ペ、ペットつて……。あの、流石に非人道的といえますか、なんと言うか……」

「え、だめ？」

なんかすごい引かれてんだけど、なして？

「ペ、ペット……!?! ハツカ様の……!」

あ、ほら。本人はなんか喜んでるっぽいよ。

「せいぞろい」

それはちがう。

普通の意味の愛玩動物程度の意味だったんだけどー？

あれー。この子、売女とかじゃないはずなのに何でこんな積極的なの？

まだ『つり橋効果の呪い』解けないの？

あとさ、様ってやめて？

俺どちらかと言ったら、敵に

「き、貴様く〜!!」

って言われる方だから。

「と、とにかくダメです。なんか、良くない気がします」

「えく、じゃあ何なら良いんすか〜？」

こっちは女将さんのと約束がかかってるんでい。なんとかここに置いて貰えるようなんかしなきゃ。

「そうですね…ふっ、『お料理係』、ならどうでしょう？」

「お、『お料理係』!？」

ピシヤツと雷が落ちた気がした。

「あー、あの一、それはー、それだけは何とかならんですか？ 流石に可哀想なんでー」

「どの口が可哀想と…」

「あ、の。私、お料理ならちよつとは、自信ありますよ？」

何もわかっていない子がそんなことを言った。

「あら、そうなの？ なら『お料理係』で、けつて〜」

「いやいやいや、ちよつと待っててくださいよ。流石に何の説明もなしというのは…」

キョトンってかわいく首傾げてる少女に『お料理係』の恐ろしさを教えてあげることにした。

「良い、あのね? 『お料理係』って言うのは…」

俺の後ろで、何とかさんが固唾を飲んだ。

「朝、昼、夜、何処かで1日1回はご飯を作らなきゃいけないの…」
「きゃー！ー！ー！ いやー！ー！ー！ そんなの無理ー！ー！！」

何とかさん、うるせえです。

『お料理係』の恐ろしさはわかりますけど、耳元でそんな大声出さんでください。

「… え?」

ほら見たまえ。あまりの恐ろしさにこの子が呆然としてるじゃん。

「そ、それだけですか…?」

更にガクガクと震え膝から崩れ落ち…… て無い?

あれ?

り、理解できなかったのかな?

「え、えつと。もっかい言うよ? 1日1回はご飯を作らなきゃいけないの。おーけー?」

「え? ええ、向こうでは毎日それよりも多かったですから…」

何とかさんと顔を見合わせる。

「な、なんてことなの…!? 人間って毎日そんなことを!」

「ま、まじか…。やべえよ、人間。そんなに働いて何が楽しいんだよ…。」

2人してガクガクと震え膝から崩れ落ちた。

色々あつたけど、なんとか『お料理係』の一員に加わり、最もキツイと言われる朝ごはん担当になったというのにケロツとしていた。

な、なんなんだ、この子。

その後、魔王様から『キキヨウ』の名前を与えられ、『お料理係』朝ごはん担当『アキノナナクサ』の仲間入りを果たした。

そして今日この日、大図書館にある図鑑の人間の項目に「お仕事が好き」「クレイジー・ワーカー」と加えられ、見たものに恐怖を与えた。

健やかになるときも…

ああ、今日も疲れた…。

よくわかんない勇者の話と心の声、前回の惨敗から未だ続く西支部全体のお通夜モード。

はは、疲れがしゅごーい…。

…
もう無理休む。

そう決めて自室の戸を開け部屋に入る。

「フンフンフン、スンスンスン… ああ〜♡ やっぱりハツカ様いい匂いします〜♡

あと、も、もう1回だけ…。で、でも、これ以上は… バレたときが…。つて、ハツカ様!?”

「うわあ、びつくりした… 居たの? ごめん、気付かなかった」

それほど疲れていたのだろうか…。

「え、え〜つとですなハツカ様。これは決してベッドの匂いを嗅いでたとかじゃなくてですね? そ、そう! お、お布団温めておきました!」

な、なんと、そんなことまでしてくれてたのか…。
人間というのは恩義を感じやすいみたいだね。

でもそろそろ本格的に、

「コイツ、もしかしてホントに俺のこと好きなんじゃね?」
つてキモイ勘違いをしてしまいそうだから、程々にね?

畜生！ 呪いめ！ 俺の心を弄びやがって！

「あ、キキョウいつもありがとね？」

勿論お礼を言うのは忘れない。

「あ、いえいえこれくらいのこと…。」

でもごめん、もう無理だと返事も待たずに布団に入る。

うん、あつたかくて気持ちいい。

これが女の子の熱だと考えると変な気を起こしそうになるけど、あくまで彼女は俺の友達。それ以上でもそれ以下でもない、はず。やることやってしまったら女将さんにも顔向けできない…。

流石に公私を弁えないとね。

あくまで恩返し、あくまで恩返し、断じて恋愛感情的それではなく、呪いによるもの。

よし寝よう。

そう何度か唱え床に就く。

…
なんとなくベッドが濡れてる気がするのはきつと気のせいだろう。

「あ、寝顔も可愛い…♡ しゃ、写真！」

パシャパシャ投影機の音も気のせいだろう。

☆☆☆

キキヨウを魔王城に連れ込んだ（言い方）次日、キキヨウが俺の部屋にやって来た。

朝ごはんを作り終えたとは思えないようなサツパリとした顔で一切の疲れを感じさせない。

や、やっぱりすげーよ、この子。

「改めまして、あの時危ないところを救っていただいた上、非常に恵まれたお仕事まで紹介して頂き、本当にありがとうございます！」

「お料理係はあまり恵まれてないと思うけど…。」

それでもまあ、本人が喜んでるならいいか。

そんなキキヨウちゃんが突然こんな宣言をしてきた。

「健やかなるときも、病めるときも、喜びのときも、悲しみのときも、富めるときも、貧しいときも、あなたを愛し、あなたを敬い、あなたを慰め、あなたを助け、この命ある限り、真心を尽くすことを誓います！」

「それ、結婚式の時のやつだよ」

人間の文化的にどうなのかわかんないけど、こっちだとそれ、結婚する時の誓いの言葉だからね。しかもかなり重いやつ。

やめてよね。ホントに勘違いしそうになるって言ってるじゃん。

俺の中で要約して

「恩返しをしたい」

ってことになっておくよっ…

「うん、こちらこそよろしくね」

「は、はい！ よ、よろしくお願いします…！」

再びガバツとお辞儀をするキキョウ。

頭を下げたことにより長い彼女の髪が目には掛かる。

… 前から気になってたけどその髪、邪魔じゃないのかな？

そう思い自分が普段使ってる髪留めを取り出し、彼女の髪が目にかからないように留めてあげる。

雑務とかしてる時に目に入ってくる髪が鬱陶しいから買ったもの。まあ、かなり安物だけどね。

「これあげる。良かったら使いな」

その日以来、キキョウは毎日部屋に遊びに来るようになった。

そ、そんなにこの髪留めが欲しかったの？

誰でも簡単！朝食レシピ

その日は(前日にお昼寝しまくったせい)いつもより早く起き、とても暇だったので朝の散歩に城内を歩いてみることにした。

? 蝙蝠さんは本来夜行性?

知ったことか。俺は俺だ。その他の一般蝙蝠と一緒にするな。

☆☆☆

魔王城、中央。

日が昇る前ということもあつてか、さつきから廊下を歩いていても誰とも会わない。

… と言うかそもそも、ウキウキで歩いているのは良いけど、ここがどの辺なのか全くわからない。

…。

… 改めてみるといつもは騒がしい廊下(ここ)も静まり返ってるのは新鮮だ。

そんな空間が俺を迷子という現実から遠ざけてくれる。

聞こえてくるのは自分の足音、誰かの寝息、外の雷と何かを断とうとする不快な音。

… 何かを断とうとする不快な音?

そ、そういえばさつきから変な音がしてるような…。

何処からともなく、ダンツ！ダンツ！ と、まるで朝食に使う食材を分量ごとに分けるため切り分けるかのような音が聞こえてくる。

な、なんだろう…。すぐく気になる…。！

好奇心猫を殺すとはいうものの人までは殺せまい…。蝙蝠だけだ。

ふっ、好奇心め。さては大したことないな？

という訳で行ってみようか。音の鳴る方、その先へ！

迷子も忘れ、更にドカドカ進んで行く。

音をたどってみるとどうやらここから聞こえてくるらしい。

『第1料理室』

古くからある部屋だが未だ何に使われているのかわからない。

過去に何度かここを通りかかったことのある人によると、出てきた者全員が総じて死んだような顔をして両手いっぱいのご飯を持っていたと…。

…。一体、何の部屋なんだ。

怖いな、怖くなって思ったんですよ俺も。(超早口)

でもそれとは逆に、ね。俺の身体はスウ……。っつと、その部屋の扉に近づき、グツ！ってノブに手を掛けたの。そして勢いそのままに力を籠め扉を開けr…。

「あ、ハツカ様！ おはようございます」

キキヨウちゃんがいた。

「朝ごはんはもう少しでできますので、あとちよつと、待ってくださいね」

… 朝ごはん？ 何でこんなところで作ってるの？

未知の部屋での光景に驚き固まっていると、

「おやハツカ、お前がこんなところに来るのは珍しいな」

黒ずくめの男に背後から頭を――

「？ どうした、そんな驚いた顔をして」

… あ、知ってる人だった。

黒白のフリフリエプロンを付けた総料理長、特殊部隊『トオカカ
ン』、そのリーダーでもある『ツイタチ』さんだ。

あ、女だよ。

☆☆☆

魔王様の手によって作られた『美少女型メイドゴーレム』、ツイタチさん。元は戦闘用に作られたらしいけど、本人の希望で『お料理係』となった。

そんなツイタチさん、夕食を一人で作ってしまう腕を持ちながら『トオカカン』という部隊のリーダーも請け負っている。

『トオカカン』

特別な役割を持った奴らの集団。

この魔王城では戦闘メインの奴らが多いため、こういった役割を持つてるこの集団は何かと重宝され、意外と位が高い。

ツイタチさん以外の皆、身体が白い特徴があったり。

因みにこの前「半人半魔が出る」と未来視した奴は『ヨウカ』。少々変わった牛さん。

そしてそんな個性派ぞろいの迷惑な奴らを上手い事まとめているのがコチラに仰せられるツイタチさんだ。

更にツイタチさんは自分の当番じゃない時でも「暇だから」って毎回見に来て少し手伝ってくれるらしい。

そんなただのご主人様大好き美少女型メイドゴーレムさんだ。

ツイタチさんがスゲエのはさて置いて、キキヨウの周りの子たちが死にそうな顔してる。

キキヨウは自分で言うだけあって流石というべきか、眠たそうな顔1つせず、いや寧ろ生き生きとした表情で城中全員分の朝食を作っている。

時々コチラをチラ見するのは気になるけど。

指切るよ、集中しな。

しかしその周りの子たちだよ。城で一番辛い仕事として有名な朝食作り、それを証明させるような表情だ。

起きてる〜？ 生きてる〜？

部外者兼傍観者である俺は暢気に調理場の様子を見ていたのだが、皮むきをしていた1人がフラフラ具合悪そうにし、ついには倒れてし

まったのを見つけた。

あらまあ、だいじよぶかい？

他の誰も気づいていないのか、倒れるのはいつもの事なのか、将又イジメられて無視されてるのか。

最後のは無いにしても朝ごはんから死臭がするのも好みじゃないからね。

しょうがないな、入りますよ。

エプロンも何もしてない奴がココ入ってもいいのかな…？

品質管理とか大丈夫？

上から怒られない？

後先考えるのは苦手だからとりあえず近寄って聞いてみた。

「あのく、大丈夫ですか？」

「うく、んあく…。あ、ありがとうございます。すみません。キキヨウちゃんが来てくれるから楽にはなっただんですけど…。」

…あれ？　ところであなた、だれですか？」

「あ、(迷子でここまで迷い込んでしまった)西支部のハツカです。一応ツイタチさんの部下ですけど…。」

「あ！　あなたが御噂の『ハツカ様』ですか？」

御噂？　ツイタチさんの部下ってそんな有名なの？

「…なにそれ」

「おや、違うのですか？　キキヨウちゃんをここに勧誘する際、イケメンムーブをかましまくったと噂の…。」

「それ俺じゃないわ」

そんなことする奴いるのか、卑しか奴たい。

「キキヨウちゃんと『オカミサン』の話を聞き泣きまくった挙句、門番さんにその顔を見られ笑われたと噂の…。」

「あー、それ俺だ」

こんなことした奴がいるんです、恥ずかしいですね。

「あ、ありがとうございますー！ キキヨウちゃんが来てくれてなかつたら大変なことになってましたよー。ありがとうございますーハツカ様ー」

「ちよつと、やめて。皮むき器持った手で俺に継ろうとしないで。あとハツカ様つてもやめて。キキヨウにいくら言っても治んないんだけど、せめて君は言うのやめて」

急募、女の子に皮むき器向けられてる時の対処法…。

迫る恐怖に狼狽していると、

「な、なにしてるんですか!？」

と、キキヨウの声。

よ、ようやく気付いて貰えたか。

…助かった。

「知らないのか？ 生の卵を袋に入れ凍らせるとそれはまた美味で…。」

「そ、そうなんですか!？ 勉強になります」

「ああ、解凍するときは自然解凍で大丈夫だ」

そつちかい。

いい加減こつちに気付いてくれー。

「ありがとうございますー！ー！」

君は仕事しろ。

改めて調理室は恐ろしい場所だとわからされた朝だった。

「…うま」

そんなでもご飯が美味しいのがちよつと悔しい。

A Full New World

「あ、シロちゃん！」

「あら、ホント」

「ほー、あれが噂のシロちゃんデスカ。見るからに弱そうデスね」
「…しろい」

なんかハーレム増えてね？

勇者御一行も段々とレベルを上げ、西支部攻略が近づいてきた今日この頃。

勇者御一行はいつもの食堂でご飯を食べていた、
んだけど。

久しぶりに覗いてみたらなんか仲間が増えちゃってる。

キキョウちゃん関連でいろいろバタバタして、ここ最近偵察が出来ないでいたからね。

畜生、週刊誌を読み過ぎしちゃった気分だ。

「なーなー、この白いのは毎日来てたのデスカ？」

「んーん、違うよ。前に来たのはく…」

「魔王軍からの襲撃があった前日ね。そのことを知らせるかのよう
に来てくれてー…」

へー、シロちゃん。便利な奴だったんだな。

俺もかなりの頻度で来てるけどまだ一回も会えてないんだよな。

「も、もしかしてシロちゃん…!」

「アタシ達にそれを伝えに来てくれたの!」

「な、なるほど…! 確かにシロさんを見かけた日、付近には必ずと言っているほど魔王軍からの進撃がありますからね…」

速報、シロちゃん有能だった。

まじか、シロちゃんも未来視とか使える奴なのか…?

(明後日の方向ってどこなんだろ…)

勇者全然聞いてねえし。

会話に参加しろ。

「… ゆーしゃ、きいてた?」

「え? うん、聞いてたよ。シロちゃんって凄いんだね」

聞いてたんかい。

やっぱり凄いよコイツの感覚。勇者つてば皆そうなんだっけ?

「ねえ、勇者様、シロちゃん飼おうよ」

「飼うって…」

飼うって…。人間飼うとかどんな趣味してんだよ。引くわ。

「ボク、お世話したい!」

コイツとんでもねえ趣味してたのか。

「う、うん…」

おい勇者、そこじゃねえだろ。世話するしないじゃねえんだよ。ア
ンタはせめて正気であれよ。

「… よしー！」

よしじゃねえよ。今のでなんの決意が固まったんだよ。

「シロちゃんをパーティーに入れよう！」

ん？ …… んー、まあ、さつきよりは待遇良くなってるけど…。
何でさ、そんなに上からなの。

それとまだ増えるんだ、ハーレム。

… あ、そつか。渦中のシロちゃんは結構前から勇者たちの会話に出てくる子だからね。相当手に入れ… 失敬、仲間にしたかったんだろうね。

全く、しつこい男は嫌われグハツ!?

「やった、シロちゃん捕まえたよ。勇者様〜」

突然、なんとかって言う名前の勇者の従者に捕まってしまった。

う、そ… だろ？ き、気付かれたのか…？ な、なんで!?
しかも回避する間もなく捕まってんじゃねえか。

コイツ、どんだけ速いんだ…？

「わー、アンタ、いくらシロちゃんとは言え蝙蝠を素手でって…」
「リリカさん、蝙蝠さんは細菌とかいっぱい付いてるらしいですよ」
「うわー、リリカきつたなーいデス」

「… ばっちい」

失礼な。毎日お風呂入ってるから綺麗そのものだ。
いやいやそれよりも！ し、シロちゃんって俺の事だったの!?

「え？あ、ああ、うん」

(蝙蝠を鷲掴みって…)

勇者ちよつとも引いてんじやん。

(もつと絆を深め合って行くうちに、仲間になりたそうにこつちを見てくるものと…)

勇者、気が合うな。こればかりは俺もまだそつちが良かったぜ。
どちらにせよ嫌だけどさ…！

ぐっ！ ふっ！ おおおおお!!

だつめだ、全然ビクともしない！ こいつ握力強すぎないか。魔法
使いだよな？

「なんかシロちゃんがモゾモゾしてる」

おい。俺の精いっぱい足掻きをモゾモゾで済ますな。

人間の姿ならもつと強いからな！ …… 多分。

「ほら逃げちやう前に早く魔法掛けちやいなさい」

アンタら、残酷だよ。いくら世の中弱肉強食とは言え捕まる側の気
持ち、考えたことあるか？

(蝙蝠… 鷲掴みって…)

お前はまだその沼から脱せないのか!?

せめて見届けろよ、俺がアンタらに堕ちちやう様をさ！(吹っ切れ)

… ってあれ、俺もヒロインなのか？

嫌々ヤダヤダ！俺は男だぞー!? 人間の姿見せてやるーかー!?

「うん！ シロちゃん、準備は良い？」

良くない！ 逃げるからその手を放して！

「うん、ばっちりだね！ それじゃ、いっくよー！」

前略、魔王様。

魔王様に置かれましたはいかがお過ごしでしょうか。

わたくし、ハツカは――

「じゃあ、シロちゃん。これからよろしくね！【契約魔法】！」

ギイイヤアアアアアアアー!!

――NTRました(?)。

(蝙蝠って何食べるんだろ…)
お前を喰ってやろうか？

勇者との旅

魔王城某所。

薄暗い部屋を魔石の光が照らした。

「お、今回の偵察報告がきたぜ」

「早いな、誰からだ？」

1人が慣れた様子で魔道具を弄りだす。

「ちよーつとまってなー。あー…この周波は、ハツカだな」

「アイツかー…。偵察隊1番の若手だからな」

「蝙蝠つてのは良いんだけどな、つと…。…解読するぞ」

「おう」

相方がメモ帳を取り出し聞き取る準備をした。

「えく…つと。『ハツカです。この度勇者一行との接触到成功し、これから共に行動することとなりました』…？」

「…は？」

『それに伴いしばらくの間城に戻れないと思います。魔王様及び四天王サイジャクさん、あとアキノナナクサの新人キキヨウにも伝えてもらえると思います。行く先につきましては次回報告いたします。以上』…だ、そうだ。

…これ、偵察中にバレてその成り行きで、とかじゃないよな？」

「そ、そうであってほしいけどな…。よし、書けた」

「…魔王様になんと報告すれば」

1人が頭を抱え悩みだした。

「あー、『ハツカ君が敵の懐に侵入成功しました。彼凄いつすね』。と

かで良いんじゃないか？」

「お前、それは…」

戦う上で必要となってくる敵の情報。その収集に明け暮れる偵察隊の報告だ。

報告は一言一句、漏らさず伝えなければいけないが――

「…良いかもな」

「だろ？」

――誤字^{ミス}つても意外とバレない。

☆☆☆

「なーなー、白いのー。コレとコレ、どっちが食べたいデスかー？」

なんとかかって名前の女が俺の前に2つの得体の知れない物を差し出し言った。

勇者たちは『オカシ』って言ってたけど、未だその正体は掴めない。

「なーなー、どっちが良いデスかー？ 優しいオレがおーつくれてやるデス」

どっちも要らないよ。なにそれ、食べたくない。

「ふんふん、なるほど。右の方が食べたいってさー」

だまれ、超音波^{この声}がお前らに聞こえてたまるか。

実は魔王城の技術部さん達が総力を挙げたところ俺達の周波に合わせた受信機を造ることに成功した。

俺は魔道具のことに理解が及ばないので詳しく説明できないが簡単に言うと、ある程度の距離からなら俺の超音波とかを拾って信号として変換できる優れたもの。

ほへー、魔学の力ってすげーのな。

そんな超音波で先ほど本部に今回のことを説明した。

あーあ、魔王様に怒られるかもなー。報告ではあまり多く言っただけで、かなり最初からバレてたっぽいからなー……。

「しょーがないデスねー。オレが食わせてやるのデス。

ほれ、食ーらえ」

ハブツ?! なんかに口に放り込まれた……。

ぶえええー。パッサパサでどんどん口の水分奪っていくくせに妙に甘くて美味しいよ……。

「あ、食べた〜」

食べさせられたんだよ。

「おー、どうデスか? 旨いデスか?」

……不味い。

「ふんふん、なるほど〜。美味しいって〜!」

お前はさつきから跳躍翻訳すんな。

あともう少し力を緩めろ。握る力が強すぎて痛いんだよ。

「そうデスか！ おねだりしたらもう1つくれてやるデス」
「ボクの分も食べる〜？」

そして周りの奴らはもう少し止めるなり、注意するなりしろよ。
俺だって生き物なんだぞ。

古代の王は生き物の命を大切に扱えって言ってたの（魔王様が教えてくれたから）知ってたんだぞ。

「あの2人まだシロちゃんまで遊んでるわね」

暢気だな。止めろよ。さつきから地味に痛いからさ。

「楽しそうで何よりです」

お前はパーティーで一番まともだと思ってたことが間違いだったか。割とサイコ思考で怖いぞ。

「… ころもり」

お前はなんだよ。もっと言いたいことあるならはつきり言えよ。
そんなんじゃ、伝わんないよ。

「洗ったから大丈夫でしょ、行ってくれば？」

お前の勘が良いからその幼女はそんななんだよ。もっと教育しろ。

… あと元々綺麗だから。

「… いく」

来るな。

なんか1人幼女増えたんだけどー。もう疲れたからこれ以上イジメるのやめてくんね。

こっそり見てたことなら謝るからさー…。

「シロちゃん仲間にして良かったわね」

「はい」

「そうだね」

(僕も後で触らせてもらお)

お前やつぱワンチャン狙ってんの？ キモイよ。マジ人間の姿見せてやろうか？

☆☆☆

「…よし、皆そろそろ行こうか」

勇者がそう言うのと女達が出発の準備を始めた。

どうやら休憩を終え、次の目的地に行くようだ。

…はん、勇者たちめ。オレがここにいることを忘れちゃ困るな。お前らの行く先、行動の1つ1つまですべて報告してやるぜ。

散々な扱いを受けてきたがついに反逆の狼煙を上げるときが来たようだな。

今に見てる？ サイジャクさん達が来てお前らを取っ捕まえて地下牢に放りこグツハ!?

「…もっ」

「良いよ。交代ね」

「あー！ 次はオレ、デスからねー？」

∴もしかして俺っておもちやにされるために仲間に入れられたの？

勇者と水浴び

「川だ」

旅の道すがら勇者とその御一行は流れの緩やかな綺麗な川を見つけた。

「わくわく、きれ〜！ 勇者様〜！ 水浴びしようよ！」

「オレも！ オレもしたいデス！」

「…する」

毎日この勇者たちは【洗濯魔法】という身体や衣服を綺麗にできる魔法を使っているので汚くは無いのだが、ただ気分的に水を浴びたいようだ。

「うん、そうだね。時間もいい感じだし今日はここでキャンプにしようか。」

遊んで来て良いよ」

「やった〜！ じゃあ、行ってくるね〜」

「ん、勇者は来ないのデスか？」

「…こい」

子供3人が勇者も誘った。

いいぞ、勇者そのままヘイト集め頼んだ。俺はどっかで休んでくる。

「僕は野営の準備とかあるからね。3人で行ってきな？」

勇者偉いな。率先して仲間のこと考えて。そんなだからハーレム築けてるのか。

「えー、来ないのデスカー？」

「ご、ごめんね……。あ、それならミサとシイノを誘ってみたら？」
「うん、わかった〜！ 聞いてみるね〜！」

3人が女2人の所に行くのを見計らって、近くにある木へと向かって飛んぐエツ！

「シロちゃん、どこ行くの〜？ 川はこっちだよ〜？」

「どうしたんデスカ、白いの。水は苦手なのデスカー？」

「… はやく」

は？ こいつ等あの2人のとこに行ったんじゃないのか？ てかこのピンク、蝙蝠を空中で捕まえられるのか？

「ほらほらどうしたの〜、早く行くよ〜」

畜生放せ！ この身体で水に濡れると乾かすの大変だから嫌なんだよ！ 身体がズツシリ重くなって飛びずらくなるんだよ！

ジタバタしてる間にも無情に運ばれ川まで来てしまった。

「あら、遅かったわね」

「先に浴びてましたよ」

2人がもう先に川に入っていたようだ。
てかこいつ等いつの間この2人呼んだんだよ。早すぎるだろ。

「良い？ シロちゃん。いっくよ〜〜！」

あ、おい馬鹿。急に飛び込むな。身体に水を慣らしてからじゃない

と急な温度変化に身体が反応ブハ!?

飛び込まれた。

てか川の水冷た!?

「あくあ、シロちゃんもびつちよびつちよだね〜」

お前が濡らしたんだろ。あーあ、乾かすの面倒なのに……。

「白いの！ これでも食らえ！ デス！」

そんな声とともに大量の水が飛んで来ブハ!?

「どうデスカ、白いの。もっと濡れたデスカ！」

これ以上濡れる量に変わりわないけど冷たいからやめて欲しい。
てかやめろ。

「……とお」

ほーら見ろ、お前らがそんなことするから幼女も真似しブハ!?

「……どう」

冷たいよ。てかホントにやめて。体温が奪われてくのを感
じるよ……。

もーやだー勇者く、助けろく。

魔王軍の魔物が勇者に助けを求める奇妙な光景となったがホントに寒いので勘弁しろ。

そんな風に願っていると何かの偶然かピンク髪の手束縛が一瞬緩んだ。

——ここだ。

俺はその一瞬のスキを見逃さず一気に手から逃げ出した。

「あ、シロちゃん！」

うるしやーい！ もうヤダ！ 勇者んどこ行く！

濡れてしまい重くなり飛びずらい身体を何とか鼓舞して勇者の元へと飛んで行く。

踏ん張って勇者の元へと飛んでいくとそこに見えたのは、焚火に当たる勇者。

おお！ 火だ！ よくやった、勇者！ 褒めて遣わすぞ！

さらにスピードを上げ、一気に勇者の元へ不時着する。

「っわ！ し、シロちゃん？ びっくりしたー」

勇者がなんか言ってるが今はどうでもいい。

ああ、あったかい……。

焚火ってこんな温かったつけ……。

「わー、シロちゃんびしょびしょじゃん……。乾かしに来たの？」

そうだ、察しが良いな。という訳だからこのまま少し休ませろ。

(わー、どうしたんだろシロちゃん。今日は甘えんぼさんなのかな?)

違う。断じて甘えんぼさんなんかじゃない。

勘違いしないでよね。

「あー、いたー！ シロちゃーくん、どうしたのー？」

ピンクに見つかってしまった。

どうしたもこうしたもないよ、見て分からんか。水浴びは嫌だからこうして乾かしてんだよ。

「あー！ わかったー。もしかして勇者様と一緒に入りたいのー？」

いや、違う。そもそも入りたくないの。

「勇者様ー、勇者様も一緒に行こーよー」

「え、いや、僕はまだ準備が…」

そうだ勇者頑張れ。気分が良いから今日は俺も手伝ってやるぞ。

「えー、そんなの後で良いじゃーん。やっぱり勇者様も入りたいでしょー？」

「うっ、それは…」

おい勇者どうした？ 珍しく俺がお前を応援してやってんだぞ？

断れ！ 断るんだ！

(この時、僕の頭に天使と悪魔が現れた)

あ、なんか始まった。

(おいトウヤ、とつとと水浴びに行こうぜ！ 気持ちいぜー？ この時期の水はよー？)

嘘をつくな。冷たいだけだったぞ。感覚バグってんのか。

(ダメよトウヤ。貴方は皆のためにご飯を作らなきゃ。それに今ならシロちゃんを独り占めできるのよ (裏声))

なんだ、こいつも煩惱まみれじゃないか。

(くっ…ど、どうすれば…)

頑張れ簡単だ。ただそいつに「行かない」って言うだけだ、簡単だつて。

(ほらほら、早く行こうぜ？ 今ならあいつ等の薄着が見れるんだぞ？)

あ、まずいか…？

(う、薄着!? それは見た…じゃなくて！ ダメよ！ そ、そんな薄着だなんて…み、見たく… (裏声))

あー、まずい！ 年中発情お盛んなの人間の弱点を突き始めてきた。ハーレム勇者であるこいつに効果は当然…

(そ、それは見たい…！)

抜群だー！

おい、頑張れえろ煩惱勇者（笑）！
そんなあの時だってあの時だって、何回も見てたじゃないか！
今更だろ！

（そうだろ…？ しかも今回は、水に濡れてるんだぞ…？）

（み、水に…）

（濡れてる…!?（裏声））

あー、もう無理だわ諦めよ。

未だ続く脳内猥談を聞き流し、超音波で今回の勇者の助平っぷりを
報告してあげた。

感謝しろよ。

そして無事脳内会議で敗北させられ勇者は仲間にホイホイついて
行き、俺は再び水責めの刑に処されてしまった。

むっつり勇者め！

お前らも俺らを見習って繁殖期を実装しろ！

勇者との冒険

「…つく！ すまない、回復を！」

「オレに、任せるデス！ 【回復魔法・中】！」

「ありがとう、助かった！」

… え、アイツ回復師だったの？

西支部を目指しレベルアップしつつ旅を続けてる勇者御一行は、何故かいつもより多めの敵とエンカウトしていた。

… あ、さーせん。俺の仕込みです。

別に勇者達に特別な恨みがあるわけじゃないけど、これも仕事だからね。

つてことで早速勇者たちの行く先を逐一報告していたのだー。

うん、何か恨みがあるわけじゃないけどね？

濡らされたのを根に持つてるわけじゃなくてね？

… ただ、予想外だったのが、

「ふう、今回も何とかなつたね。皆、怪我は？」

「アタシは大丈夫よー」

「はい、大丈夫です」

「ボクもー」

「… むきず」

「えー、今回もあんまりオレが活躍できてないデス！」

「ま、まあ怪我しないに越したことは無いからさ」

コイツ等、強くね？

そんなつよつよ勇者達、倒した魔物が持っていた(緊急時、何かあった時のために使う)お金を拾い集めた。

おい、人のものを取ったら泥棒だって偉い人が言ってたぞ。

勇者がそんなで良いのか。

ホクホク顔で今日の宿を探していると偶々近くにあった村があったので、今日泊れるか聞くことにした。

そこの村長に話をすると、

「世界をお救いになられる勇者様、是非とも私たちの村に泊って行って下さい！」

快く受け入れられた。

野宿回避できて良かったね。

…いや、怒ってないから。

古民家を一部屋借りてようやく腰を落とす。

ほえー。古民家って言う割には中々綺麗なところすな。

移動中の手から解放され、漸く俺も文字通り羽を伸ばせグウツ!?

「シロちゃん、村の探索行く」

「行くデスよー」

「…はやく」

休ませろ。

俺は戦闘中だってお前らの誰かのポケットにずっと入れられてたんだぞ。

… 仲間の死に様を見るよりは良いけど（死んで無い）。

「おお、勇者様のお仲間様！ 良くぞ我らの村に！ こちらをどうぞ、うちの村でとれた新鮮なフルーツです！」

「こちらもどうぞ！ 収穫したてのお野菜です！」

と、一度外を歩けば村人から色々貰ってしまい直ぐに両手いっぱいになってしまう。

「おや、蝙蝠さん。あなたにはこの指輪を授けましょう。… うむ、よくお似合いですよ」

普通蝙蝠に指輪なんて送らねえだろ。

結局、村人からの贈り物を貰えるだけ貰い、村の探索はできず仕舞いとなってしまった。

「明日の朝行こ〜」

「おー！」

「… おー」

休ませろ。

と言うかアンタらも休め。

☆☆☆

「流石に魔王城の近くとなると敵も増えてきたわね」

「そうだね、僕ももつと精進しなきゃ・・・」

よ、良かった。今回も何とかバレずに済んだ。

散って逝った仲間たちには申し訳ないが（死んで無い）、俺だって今結構危険なところに身を置いて、置かざるを得ないからね。

「はい、皆さん。出来ましたよ」

村人さん達から貰ったものを中心になんとかって名前のエルフが夜ご飯を作った。

それを一行が談笑しながら美味しそうに食べていた。

俺？ 俺は食べてないよ？

・・・ いや、俺からは食べていない。

と、そんな楽しいお食事の時間も終わり昼間の疲れもあるのか、皆早々に眠ってしまった。

・・・ うん、寝るときくらい放して。痛いよ。

寝苦しい手の中で俺も眠りにつき、

指輪を通して送られてきた魔力によって目を覚ました。

…みんな寝たか。

皆が寝てるのを確認して、久しぶりに人間の姿へと成る。

うゝ、本来は蝙蝠なんだから大丈夫なはずんだけど、体がこつてる気がする…。城に戻ったらキキョウに頼も…。

「整体術を極めたからいかがですか？」

「ってこの前言ってたし今から楽しみだ。」

久しぶりの目線の高さからは御一行皆様警戒心を放り捨てグツスリ眠ってるのが窺える。

いくら村の中とは言え、流石に見張りを就けないのは不用心じゃないのか？

あんなに優しい人たちが怪しいわけない？

…わかんないよ。

例えば

「皆、寝たみたいっす」

「ご苦労さん、ハツカ」

——魔王軍が造り上げた偽物の村かもしれない。

勇者との絆

「どうだったよ、ハツカー。俺たちの見事な変装と演出はよー」
「凄く手の込んだことやってんなとは思ったんすけど、ただの蝙蝠に指輪を送るのは流石に無理ありません？」

左の中指につけた指輪を見せながらそう言った。

サイジャクさんというのは村の隅っこにある小さめの家。ここなら勇者たちに聞こえないということここで話していた。

他の住民に変装していた兵士たちは今から勇者たちに引導を果たすらしい。

… あの人達ちゃんと捕らえるってこと理解してんのかな？ 殺しそうな勢いだったけど…。

…

ん？ なんだこのモヤモヤ。

よくわからない感情にモヤモヤしていると、外から何人もの悲鳴が聞こえてきた。

… 始まったのか、

「勇者スラッシュ!!!」

「あ、あああー!! あ、脚が… 俺の脚がああ!!」

「お、おい、大丈夫か!? 今そつちにいぐッハ!?」

「嫌だー!! 助けてくれー!! 誰か、誰か助けてくれー」

!! だれかタス………」

勇者御一行の一方的な攻撃が。

どつちが悪なんだか……。

てかこいつ等、寝込みを襲われたってのに強すぎん？

その後も魔法を放ち爆ぜる音、肉がつぶされる音、風を切った矢が誰かを貫く音様々な音が響き渡り、俺とサイジャクさんを震え上がらせた。

暫くするとあらかた片付け終わったのか、外が静かになった。

それと共にザツザツ……という足音と共に勇者がコチラにやってくるのが分かる。

「さ、サイジャクさん、勇者がこつちに向かってきてます。俺もこのまま戦いましょうか……!?!」

俺が情けなく震えた声を上げると、

「……いや、お前は早く蝙蝠に戻れ」

「へ?」

何かを決意したかのような声でそう言われた。

何故かはわからんがとりあえず言われた通り蝙蝠の姿に戻る。

指にはめてた指輪はうまいことネックレスのように首に引っかかってくれた。

… 体に痣があるのは気のせいだろうか。

床から飛び立つ。

と同時に、サイジヤクさんに身体を掴まれてしまった。

… あれ？

「悪いな、ハツカ」

も、もしかして…。

「お前…。」

サイジヤクさんが腰に備え付けられた短剣を抜き、こちらに向けてきた。

「ちよつと、利用させてもらうわ」

おーー!! 人質作戦！ 魔王軍つぼくてカッコいい！

… まあ、俺が人質つてのは予想外だけど。

「… へんか！」

俺が作戦に感動していると、勇者が扉を斬り開いて部屋に入ってきた。

… いや、普通に開けろよ。鍵空いてんだし。

スラム育ちか。

斬り開くのはお前の道だけにしろ。

「シロちゃ… 仲間を返してもらおうか!」

流石に敵幹部の前で『シロちゃん』は恥ずかしいのか。

「こんな蝙蝠が仲間だと…? ハッ! 笑わせるな。勇者も、随分と落ちぶれたものだな。(ごめんなハツカ。ホントはそんなこと思っていないからな…?)」

大層な台詞と共に小声でなんか言ってくるサイジャクさん。

大丈夫つす。寧ろ今言うたバレるかもなので言わない方良いつすよ。

「そんなことは無い!! … その子は、シロちゃんは大切な仲間だ!!」

え、何この流れ。何で急にそんな熱い展開みたいになってんの? やめてよ気持ち悪い。

「仲間。そうか、大切な仲間なのか!」

サイジャクさんもノリノリだな。楽しそうで何よりです。

「ならばその決意を見せてもらおうか! コイツを返して欲しくば! 今すぐ床に這い蹲って…!」

「勇者スラツシュ!!!」

「ぎゃあああああー!!!」

さ、サイジャクさーん!?

ノリノリだったところを勇者の不意打ちによって見るも無残な肉塊へと姿を変えた。

「…よし」

勇者はそう言うのと剣を鞘に仕舞い、名もなき肉塊から俺をそつと持ち上げ、

「万事オツケー！」

殺すぞ。

☆☆☆

「シロちゃ〜くん、良かった無事で〜！ も〜、勝手にいなくなっちゃダメじゃん。心配したんだからね〜？」

「おー、白いの！ どこ行ってたデスか？ 夜のお便所が怖いならオレが着いていってあげたデスよー」
「…しっけ」

勇者に連れられ、多少身体を弄られ、御一行の元へと戻ると熱烈な歓迎（？）を受けていた。

てか幼女怖い。なにコイツ。

周りの奴らも見えてみるが、回復された後なのか、ガチ無傷の勝利だったのか全員無事のようにだ。

良かった…

…？

何で今安心したんだ？

またもよく分からない感情にモヤモヤしてると、

「まさかアタシたちの場所がバレて魔王軍が来るとわねー」

「そうですね、村の方々が犠牲となってしまったのが不甲斐ないですけど…。」

赤毛と薄緑が今回の騒動をいい感じに勘違いしてくれてるのが分かった。

そかそか、良かったよ。バレずに済んで。

「僕は、もうこんな惨劇を繰り返さない。そのためにもっと、もっと強くなる…。」

おや、勇者の様子が…？

「そうでもしないとあの優しい村人さん達にも申し訳ないしね」

…え、なにコレ。

もしかして西支部の総力を挙げたこの作戦、勇者のパワーアップイベントに置き換えられた？

(もう、こんな惨劇は、2度と…！)

ヤバいマジでそうかも。

勇者と蝙蝠

…ん、また来た。

前回村人に化けた兵士に与えられた指輪は、魔力を送った時の波が信号となっていて、それを解読することによって向こうからの連絡を受け取ることができる。

うん、この仕事始める前に受けた信号のセミナーは無駄にならなくて良かったです。

因みに今回の連絡内容は、『帰りに塩買って来て』

だった。

なんのこっちゃや、新手の暗号かと悩んでいると、続けて信号。

すぐさま解読すると、

『ごめん、今の誤爆』

誤爆ってなんだ？

謎は深まるばかり。

指輪の贈呈と共に行われたサイジャクさん考案の作戦、『勇者の寝込みを襲つちやうゾ♡ 大・作・戦!!』は見事失敗に終わった。

いや、それどころか勇者の更なる成長につながってしまった。

だ、大丈夫なのか？

と思われたそのあなた、大丈夫なんです！ …… うん、多分。

というのも、我々魔族の強さの秘訣は基本的に『魔素』。

普段は空気中かなりの量があり、魔物の復活や魔道具のあれこれにも使われる便利なもののだが、人間たちが生活をする区域ではこの魔素がとても薄い。

ええ、そうなんです。

実は我々魔王軍、まだ本気出してないんです！

だからさ、今までの負けは負けであって負けじゃないんだよ。

ホントの戦いはこれからだ！ って言っても過言じゃないんです。いや、ホントに。負け惜しみとかじゃなくて。

休憩中、そんなことを思い出していると、

「ねえ、トウヤ。ちよつと良い？」

「ミサ？」

剣の素振りをする勇者に赤毛が近づき、話しかけていた。

「… トウヤ、アンタあの村から更に頑張りすぎじゃない？」

そうだそうだ、もつと体を休めろ。頑張りすぎて体壊しても知らんぞ？

いや寧ろ好都合だが。

「ありがとう、ミサ。でも、これは僕の為だけじゃないんだ…。」
「と、トウヤ…。」

「心配してくれてありがとう！でも僕は大丈夫だから！」

「全く…。そ、そういうところも嫌いじゃないけど…。」

「え？　なんか言った？」

「な、何でもない！」

ラブコメすんな。

☆☆☆

そんなラブコメ主人公ハーレム勇者御一行は1つ目の目標である魔王城西支部、その壁が見える岩陰で最後のキャンプをしていた。

「…いよいよ、ね」

赤毛の神官が覚悟を決めたようにそう言った。

「だ、大丈夫です！　皆さんとてもお強くなりましたし！その、いざと成れば…。」

薄緑の弓使いが少し不安そうに言った。

「大丈夫だよ、シイノ。ボクの魔法はすごく強いんだから！」

ピンクの髪を靡かせ魔法使いがあっけらかんと言った。

「そうデス！　魔物なんてオレがハンマーでぶっ潰してやるデス！」

身長に見合わない大槌を肩に担ぎ、いつも通りといった感じでそう言った。

「… まもる」

幼女が仲間を最も安心させる言葉を掛けた。

「皆行けるね？」

皆、覚悟が決まったような顔で頷き…

… いや、ちよつと待つて。あのオレっ娘さ、結局回復師なのハン
マーバンバンなの？

良い空気で邪魔して申し訳ないけど、旅しててもよくわかんなかった
ただけど…!!?

☆☆☆

暫くするとそれぞれ武器や装備のメンテナンスが終わったのか、真
剣な顔で立ち上がった。

おつと、もう行くのか。

俺は特に準備することが無かったからそのまま飛び立つと。

「あ、ちよつと、シロちゃん」

勇者に捕まれ、地面に優しく置かれた。

な、なんにや…？

「… ここまでありがとう、シロちゃん」

おや？

「僕たちは魔王城に行ってくるよ」

うん、知ってる。その事も昨日から報告してるからね。

「今日まで安全な道を教えてくれてありがとうね」

いや、あえて危険な道とか仲間と連絡しあって決めた道とかにしてたけど。

「ここからの戦いは熾烈を極める戦いとなって… えっと、うん、まあ、危ないから君はここに残るんだ」

難しい言葉を使おうとするな。中学生か。

「僕たちは必ずこの魔王城を攻略し、次の支部へと旅を続けるだろう」

勝った気でいるな。マジ本気のサイジヤクさんとか強いからね。

「必ず勝利を治めまたここに戻ってくる。そしたら… もし、良かったら…」

一緒に行こって？ いや、行かないよ。そもそも君らはここで負けるんだし。

「また一緒に旅を続けないかい？」

行かないってば。あと勝った気でいるなって。

「…」

(どうしよ、こう言ったは良いけど、この子がなんて言ってるのか全然

あれ？ これって俺の覚醒イベントかなんか？
いや、戦いの中で白い美少女とかに成ったりしないよ？ 出来はするけど……。

「…よし、それじゃあ行こうか！」

「ええ！」

「はい！」

「うん！」

「おー！」

「…おー」

…あ、おー！

いや、何やってんだ俺。

勇者の肩から無事いつものピンク髪の手の中に回収された俺は、

…なんか、安心するー…。

じゃなくて！

超音波で信号を送った。

『勇者一行、行きます』

☆☆☆

「…勇者が、来るぞ」

「よし、直ぐに回そう」

☆☆☆

「サイジヤクさん！ たった今ハツカからの連絡が来ました！」

「おう！ 来るのか、勇者達が！」

☆☆☆

「に、人間如きが…！ 人間如きがハツカ様をペットだなんて…！

羨まし、じゃ無くて許せない…！ ちよつと良いかも…なんて思っ
てない…！

く、首輪を着けたハツカ様なんてぜ、全然想像してない…。そんなハツカ様も見てみたいなんて思っ
て… あ、鼻血出た」

「キキョウちゃ——ん！ これってどうすれば… って!? は、鼻血!? だ、大丈夫!？」

西支部攻城戦、始まります。

勇者と攻城

魔王城西支部。

魔王城と呼ばれてはいるものの、見た目は塔。

その塔を中心に街が発展し、円形の壁が街や塔を守るように聳え建っている。

バザールとか鍛冶屋等様々な施設があり、目的もなくぶらつくだけでも結構楽しいと専らの評判。

石やレンガといった、なんか見たことあるような街成りは、一見人間側と何ら変わりはない。

だがこれは人間共に作らせたものではなく、魔王様が御一人で創り上げたのだという。

分かりずらい？

… あーつと、『迷宫でお別れを求めるのは間違っている！』という作品の舞台である『オリラオ』という街を思い浮かべてもらえればいい。

大体そんな感じ。

そしてその円状壁の前に勇者と従者御一行が並んだ。

それを見た門番が警鐘を鳴らし、兵士がやってくるのを待つ…

「勇者スラッシュユ!!!」

え、ちよ！

勇者の剣から迸った横一線の閃光はその剣から離れても輝きを失わず、城壁へと吸い込まれるように向かって行き、

「はっ！」

その壁を門番さん諸共もの見事に破壊した。

「行くぞ皆ー！！」

畜生勇者め！

☆☆☆

『被害甚大！ たった1振りです正門側壁の38%消失！ 住民の皆さんは速やかに避難してください！ 繰り返します…』

ちよつと待って、思い描いてた勇者戦じゃないんだけど…!?
なんかヤバい？ ヤバいですわ!?

さ、流石に手の中にある訳にもいかないからさらつと脱出を…。

ぬ、抜けねえ！ コイツいつにも増して力強くないか？

や、やめろ！ こんな所、とつと出て行ってやる！ お、俺は1人で城に戻るからな…！

なんて考えてると、

「よお、勇者ア…。派手にやってくれてんじやねーか…。」

「四天王、サイジャク…！」

さ…

サイジャクさんキターー！！

サイジャクさんが大勢の兵士を引き連れ勇者たちの前に現れた。

濃い魔素で活性化しているのか、その肉体は無残に切り裂かれてた頃とは比べ物にならないほど盛り上がり、所々浮き出た血管が発光している。

かっけえー！…。

「…この壁、お前がやったんだろ？ 困るんだよな。壁の修繕って結構大変で、費用だつて馬鹿に…」

「勇者スラッシュ！！」

ておい！

何時になったたらその不意打ち癖治るんだよ。勇者なんだろ!? せめて正々堂々戦えよ！

「…相変わらずだなー、その不意打ちは」

「な…!? き、効いてない…!?」

す、すげー！… さっすがサイジャクさん！

「そんな攻撃じゃ今の俺は倒せグツハ…!? い、いつでえー!?」

あ、あれ？

「時差!? 時差で来たぞ今の!? な、なんなんだクツソイツテエー！！」

さ、サイジャクさーん!?

「よし、皆今だ！ 行くぞ！」

「ええ！」

「はい！」

「うん！」

「おー！」

「…おー」

ふざけんな勇者ー!?

☆☆☆

「は、ハツカ様！ 大丈夫でしたか!? …… ってあれ、首輪は？」

首輪？ 何それ。

何とか戦闘を掻い潜り、城内に戻ってくるとお久しぶりキキョウちゃんが出迎えてくれた。

え、いや逃げたんじゃないよ。俺元々戦闘用じゃないし。

そんな俺の役目の終わったからね。漸くシロ…………… 城に戻って来たんです。

「久しぶり、キキョウ。こんなところにいたら危ないから早く地下に避難しなきゃ」

地下には非戦闘民及び外の非契約者・住民が避難できるような『しえるたー』？ という名前の部屋がある。

とつとと避難命令は出てたはずなんだが…

「あ、そうでした。ハツカ様お疲れ様です。こちら『生き血ゼリー』で

す。早くお召し上がってほしくてここで待っていました」

き、キキヨウ。。。

「俺、生き血とか好かんよ?」

「あれ!」

「吸血蝙蝠じゃないのだよ?」

知らなかったのかい?

「てかそれ誰の血なのさ」

「え? ええつと。。。そ、それはく。。。」

「キキヨウ、何やってんのよ。早く非難するわよ。。。つてああ! 貴方がハツカ様ですね!? 偵察任務お疲れ様です! さき、ハツカ様もご一緒に避難しましよ!」

キキヨウちゃん、同僚に話すときもハツカ様って言うの辞めようね? 俺、様って付けられるほど立派な奴じゃないからさ。

勇者と罰

「ハツカ様、次は何しますか？」

「じゃあ、人間達が酒場でやってた『ぽーかー』ってのやってみようか」

しえるたーの中で暇そうな人たちと遊んでいると、終戦のお知らせが流れてきた。

… 終わったのか、外出て見に行こうか。

☆☆☆

「おらー！ さっさと歩け！」

誰だこんな在り来たりな台詞を吐いてるやつは。

勇者と魔王軍との西支部戦が始まって早10時間。
どうやら勝敗が着いたようなのだが…

「ああ、うっさいわね！ 歩いてるじゃない！」

「あんだこの雌。負けたっつうに口答えしやがって…」

片腕吹き飛んで顔からダラッダラの血を流し続けているサイジヤクさんが紐で繋がれた勇者御一行と城に入ってきた。

わざわざこんなみんなが集い、目立つような場所で何するんだろうか？

「ミサ、やめなよ… あ、あの僕達ってこれからどうなるんですか？」

なんだ、あいつ等負けたつてのに元気じゃん。

… いや、よく見たら後ろの子供3人は元気ないな。怪我してるわ

けでもなさそうだし、どしたんだ？

チラリと勇者と目が合う。

ん？ あ、

わーはっははー。どうだ！ 突然仲間だと思ってた奴から裏切られた気分は！

いや、今は人間の姿してるからわかんないだろうけどさ？

チクン

？ … な、なんだろう。今なんか胸がチクチク？ モヤモヤしたよ
うな…。

「あ？ なんだー？ 気になるのかー？ 今迄散々仲間たちを殺つて
くれたからな…。」

そんなお前らには…。」

「消えてもらうって言うんでしょ？」

「… え？ 何でそんな思考になるの？ 怖っ…。」

「…。」

魔王軍幹部に引かれるってどんな気分なんだろう…。

「消してほしいなら消してやるが、とりあえずご迷惑をおかけしたで
あろうこの住民さん達にごめんなさいして来い。」

「ここの人たちは優しいから許してくれると思うけど、もし無理な
ら…。」 腕の一本覚悟しろ」

「ひっ…。」

子供がビビった。

「…冗談だ。早く行ってこいよ」

敵にも冗談言って和ませてくれるサイジヤクさん優しいっすね。

☆ ☆ ☆

暫くすると、ごめんなさいしてきたのか両手いっぱいにお野菜、果物とどつかで見たことある姿で戻ってきた。

「おう、帰ったか」

野菜果物には全く触れないサイジヤクさんが西支部の民度の高さを証明している。

「えつとく。」

『お前らにはまだ俺らと戦えるだけの力が残ってる。その力を取り除くために残念だが暫くこの領域で暮らしてもらう。この領域特有の魔素がお前らのなんちゃをどーとかで、うん、まあ、力がドンドン無くなっていく』。

だってさ。理解したか、したな」

サイジヤクさんが何かの紙を読み上げる。

「は、はー!? それだけ!? 実は裏でもっと…」

「うるさい、説明の途中だ。口答えするな。お前らは俺らに言われたことに「はい」と返事してそれに従えばいいだけだ。わかったか」

早口にそう言うとさらに説明を続ける。

「お前らにつけてもらってるその首輪はこの領域の魔素が吸えなくな

ると自動的に縮むようになってるからな。

それ以外では人体に影響はない」

勇者御一行の首には黒い首輪型の魔道具が付けられてる。

うちの製作部は凄いな……。

「てなわけで、お前らには近くの家を貸してやるからそこで生活しろ。そっちが変なことをしない限りこっちは攻撃しない」

サイジャクさんが勇者に家の住所が書かれた紙と家の鍵を渡す。

「自給自足できるようにはしとくけど、なんか足りないもんあったら近くの店行くか俺たちのとこ来い」

大抵の家にはお庭と畑が付いている。恐らくその事だろう。

「御近所さんたちとは仲良くな？ たまに何かもらえるかもだぜ？」

そう言われ、一行がさつき貰った野菜たちを見る。

これはホントにそう思う。俺もしょっちゅう……。

「ゴミの日は火土土の週3日な。朝の9時までに出しとかないと回収してもらえないし、それ以外の時間に出すと迷惑がられるから当日に出すように」

住民トラブルを避けたいからね。ここの人たちは優しいからゴミ関係で怒らないらしいけど。

「二応監視とお世話係は付けておくけど、まあ、なんだ。お前らも人間なんだから溜まるもん溜まるだろ？ 監視の目を外すことはできな

いがしたくなったらいつでもしていいからな？

最中はそれとなく視線は外すからって逃げようだとか思わないことだな」

俺も見たことあるけど人間て凄いのな。なんであんな色んな体制で……。

「今はまだ確定ではないが、安定してきたらこっちの仕事も手伝ってもらうからな。」

…… あ、人を殺せとかそんなことは言わねーから安心しろ。お前らが壊した壁の復旧とかだよ」

さつき見てきたけど周りの被害も凄いもんだった。

復旧には時間がかかりそうだな。頑張れ。

「……と、ザックリ説明したけど分からないことがあれば担当の者に聞いてくれ。」

「ここまで何か質問は？」

ヒラリと薄緑が手を挙げた。

「……いいですか？」

「ん、ああ。いいぞ？」

「どうして私たちを生かしておくんですか？ 力を失って解放されたからってまた挑みに来てしまうかもしれないよ？」

自分たちで言うのもホントなんですけどさっさと殺してしまった方が……」

「……あのさー。前から思ってたんだが何で人間てのはそんな殺戮脳なんだ？」

それはずっと思ってた、ついでに勇者は不意打ち厨だし。

「別に殺してしまってもいいんだが俺達には何のメリットもないし、それを楽ししいとも思わない」

・・・ え、ホントに？ サイジヤクさんの部下兵士達なら意気揚々と殺しそうだけど？

「それにだ。お前は今さつき『解放されたらまた挑みに来る』とか何とか言ったが、やれるもんならやってみろ」

「え!？」

「ここで暫く生活してりやー、近隣住民に情が沸くだろ。それを踏まえた上で仲間思いの優しい勇者様がそいつらを殺せるつつうなら来てみる。俺たちは迷わずそいつらに武器を持たせる」

さっすがサイジヤクさん。俺はまだその考えに至らなかつたっす。

まだまだ修行が足りないな。

「他に無いか？ 無いな。ならとつと自分たちの家にも行ってろ。後でお世話係の者がそっち行くからな」

そう言われると勇者たちはトボトボ出ていった。

それを見届けたサイジヤクさんは、

「おい、ハツカ！ 居るか!？」

「あ、はい。どしました?」

イライラ怒鳴り声をあげた。

声からわかるがすごく不機嫌なようだ。勇者となんかあったんか

な？

「俺、あいつ等の相手苦手だわ」

「まあ、かなり面倒そうっすもんね…」

俺も散々苦勞しましたよ。

「四天王様に口答えしやがって…！」

「あ、そっちすか」

相当根に持ってるらしい。

「つてわけでお世話係お前に任せるわ」

「あ、はい。わかりま… え？」

「だっってお前、あいつらと仲いいだろ」

「べ、別にあいつらの事なんて… ただ任務で仕方なく…」

「偵察ならほかの奴に任せるから安心しろ。じゃ、よろしくな」

「え…」

ツンデレ演技無視せんぞ？

てか気まずくて会うのやなんだけど…。

勇者と愉快な仲間達それと蝙蝠

西支部城下、勇者様及び御一行様用ハウス。

「あ、あのー。勇者さん達ー？ 今良いですか？」

コンコン控えめにノックして中に入ると、勇者御一行様が皆リビングでぐだーってしてた。

「え、えっと君は…？」

俺に気付いた勇者が姿勢を正したが、他の皆は未だぐだーってしてる。

人間って魔素の濃いとこだとこんな感じなのか。
それとも戦い疲れか。

「あ、紹介遅れてすみません。俺、ここで勇者さん達のお世話係？ に
任命されたハツカって言います」
「え、あ、ああはい。どうも…。」

なんだコイツ、余所余所しいな。あんなに俺の身体弄って来たくせに。

むう。

…しょうがないな、こいつ等が分かりやすい方が良いのか。

「あ、こつちの方分かりやすいですかね…。」

「えっ？」

しょうがないからこいつ等が見慣れたであろう蝙蝠、シロちゃんとやらの姿へ戻る。

… 仕方なくだよ？

「… え？」

「し、シロちゃん…？」

「い、生きてたのですか…？」

「シロちゃん!？」

「白いの!？」

「… いた」

… ?

あれ、想像してた反応と違う。

こころは、

「あー！ お前魔王軍の奴だったのかー！ ふざけるな！ もう【契約魔法】も切るからな！」

つてのを期待してたんだけど… ?

「シロちゃーんーん!!」

グツハ!?

「良かったよ〜!! 良かったよ、生きてて！ ごめんね〜!!
護ってあげれなくてホントにごめん!!!」

うん、痛い。

懐かしい痛みだ… とかそうじゃなくて！

やっぱりなんか違うんだけど!?

予想と違うんだけど!?

俺ってば勝手に死んだことになってたんすか!?

てか何でこいつ泣いてんの!?

「白いの! どこ行ってたんデスか!? 心配したんデスよ!」

え、あ、すみません…? ?

「…し、心配、したんデスよ…? オレが呼んだらすぐ返事するって、約束したじゃないデスか」

あ、はい。すみま… いや、ごめんその記憶ないんだけど。そんな約束した?

あと返事ってなんだよ。俺この姿で声出せると思ってるの?

… いや、出来なくは無いけどさ?

てかなんでお前も泣いてんの。

「…ごうもり」

あ、お前はいつも通りなのな。安心し…

「…ごうもりいー」

あ、やっぱり泣くのか…。

何なのー、コイツ等。

おい、ある意味での大人組！ さつきから涙流してないでコイツ等
どうにかしろ！

おいつて！

…？

おーい。

だめだ、あいつ等子供より泣いてやがる。

全く、何をそんな泣いてんだか…。

…!?

… いや、だからなんで俺はそれを見て嬉しいと思っただよ…。
わけわかんねー。

☆☆☆

「魔王軍である俺がこんなこと言うのもなんですけど、裏切る形に
なってしまう、なんかすみませんでした」

落ち着いて話が出るようになるまでめっちゃ時間かった。

「い、いやそれはシロちゃ… ハツカさん？ も仕事だったわけです
し、仕方ないというかー…。」

勇者がそんな御託を並べてくれる。

「ありがとうございます。でも」

でも、

「勇者さん達との旅、意外と楽しかったかもっす」

「ハツカ…」

「なので、あの…」

俺は作り涙を目に浮かべ、反省してる風を装いながら、

「いい加減【契約魔法】解いてくれませんか？」

頭を下げてそう言った。

「…えく、やだく！」

ちつ、情に訴えるような話をすれば流れでなんかできると思ったのに。

涙浮かべながら笑って言われたら…：　なんか、反論できないじゃん…。

あーあ、残念ながら勇者一行が力を失うまでこのままのようだ。

…

ん？　…　何で今少し安心したんだ？

「そんな繋がりが無くても、オレ達は仲間デスから」

「…はい」

魔法解除してもこの関係は終わらせないってさ。

… あれ？ これもしかして勇者パの1人である俺も同じ罰を受けろ、とかそんな落ち？

「… なかま」

「ああ、はい」

うん、俺は魔王様の仲間だけどね？

… ところで作り涙がずっと止まらないんだけど、これは何で？
誰か催涙成分ばら撒いた？

勇者と初めまして

「… っでことで改めて、僕はトウヤです。一応、勇者。」

あ、最近ではちゃんと住民様のために働いてるよ、勇者としてね」

勇者として魔王軍の魔物のために働くってどうなんだ？

いや、そうさせたのは俺らだけだよ？

今回俺が喋れるっでこととお世話係になったっでことがあり、改めて一同自己紹介することになった。

まあ、今まで「勇者」とか「赤毛」「薄緑」としか呼んでなかったからね。これを機に覚えようか。

何ならオレっ娘と幼女の名前も知らないし。

「うん、よろしく… ところで勇者さんの不意打ち気味の『勇者スラッシュ』はどうかならなかったんですかね、勇者としてそれっで…」

「あ、あー。すみません。国王様からやられる前にやれっでお告げを頂いたからね…」

おい国王、お前は人間じゃねえのか。

身体は魔素でできてんのか。

「えっと… アタシはミサ。神官よ… っで改めて言うのもなんか恥ずかしいわね」

何でだよ。恥ずかしがるのは勇者の前でだけにしろ。

と言うか神官って何するんだ？ この前は「勇者にお告げした」としか聞いてないけど……。

「よろしく。えっと、神官って何する職業なんですか？」

気になったことは聞いてみよう。

「え？ 勇者にお告げをするくらいだけど……？」

あれ？

た、確かに思い返してみたら偶に来る国王さんからのお告げを勇者に伝えたり、【洗濯魔法】とかの日常使い魔法しか使っていないような……。

まさかの無の……

いやいや！ 【洗濯魔法】は便利だったし、ほかにも細々したのをたくさんやってくれたからね。目立ってないだけで……。

「そ、そうなんすか。あ、いつも【洗濯魔法】とかありがとうございます」

「あら、そう。喜んで貰えたなら良かったわ」

うん、平和に行こう。

はい、次い！

「エルフで弓使いのシイノです。改めてこれからもよろしく願いますね、ハツカさん」

あ、こいつはいつも通りで良かった。

俺の事ももうハツカって呼んでるし、順応性が高いのかな。

「シイノさんの弓って命中率高いから凄いつすよね。使ってみたい武器が弓なんすけど、なんかコツとかあるんすか?」

いくら偵察だけとはいえ、いざとなった時にやっぱり攻撃手段はあつた方がいいと思つてたんだけど、弓が全然うまくいかなくてね。

「コツ、ですか…。そうですね…。」

常に、誰かを見つめる、とかでしようか…。」

「…っ!」

…? なんか勇者がゾクツとしたけど、大丈夫?

「ふふふ…。」

なんか怖いな。

「え、え〜つと〜…。あ、あの、ボク、魔法使いのりりカって言います…。」

よく握つて来てた子が落ち着きなさそうに言った。

なんだ、そんなモジモジして。トイレならこの前場所教えたでしよ。

「あの、大丈夫ですか? トイレなら…。」

「あ! あの、違うんです! あ、あの…えつと…、その。シロちゃ、ハツカさんってかっこいいなく、つて…。え、えへへ…。」

…な、なんだこの子。

もしや魔素濃度の濃い空気にやられてもしたのか…？
可哀そうに…。

大丈夫だ、あとで魔素の薄いところに連れて行って改めて俺の顔見せてやるからな。

勇者からNTったみたいになるのは御免だからね。

「リリカさん、用事があるので後で少し、良いですか？」

「え、ええく!? な、な…！ そ、そんな、そんないきなり…!?
で、でも、ぼ、ボク…！」

ちよつとお、そんな反応しないでよー。オレも勘違いしそうになる
じゃーん。

おい、周りー。君らもニヤニヤしてんなよ。

ほ、ホントに勘違い、しそうになるじゃん…。

「白いのー！ ……って、ハツカ、デシたっけ？ まあいいデス！
ペットじゃなくなったハツカはこれからオレの弟子にしてやるのデ
ス！」

今迄のはペット扱いだったんですね。そうですか。

「えっと、俺に師はいないんすけど…？」

「だーかーらー！ オレが師匠になってやるのデス！ さ、「師匠♡」っ
て呼んでみるが良いデスよ！」

えー、何その羞恥プレイー。

「師匠：♡」

言ってみるけどさ？

「!? ふ、ふーん。中々良い響きデスね。。。これからもそう呼ぶように、いいデスね。。。!?」

どうやらお気に召したようだ。

おかしいなあー、見た目的には俺の方年上かなって思ってたんだけど。。。ど。。。ど。。。ど。。。

年下が師匠って。。。。

。。。おいこら周り、ほっこりするな。

はい、つぎいー。。。。

。。。っていや、名前と職業！ そっちの方、気になるんだけど!?

「えとー。お名前と職業を聞いても。。。？」

「『師匠、教えて♡』、デス」

。。。。

「えと、次はー。。。。」

「職業は『何でも屋』、名前はハルコ、デス。師匠を無視するとはいい

度胸デスね…。」

無視しようとしたら教えてくれる優しいお師匠様好き。

『何でも屋』は型に収まらない、兎に角何でも出来るようなオールマイティな人のことだと前に聞いたことがある。

「うん、ありがとう、師匠」

「な、生意気な弟子デスね…。」

おーけー、この子の扱い完全に理解した。

「…」

「…」

「…」

どうしようかなり沈黙が続いてる！

「… えつとく、それでお名前から聞いても…？」

「… ぷい」

「なんで!?!」

また目を逸らされたんですけどー!?!

な、なんでー!?! 何で嫌われたのー!?!

シロちゃん実はハツカ様でしたく、の回では熱烈にハグしてきて泣きまくってたじゃん！ あの時の感動をもう一度く!?!

ちよ、ちよつと。周りも温かい目で見守るんじゃないやなくて名前教える

とかしてよ〜…。

こうして全員の自己紹介が無事終わり（？）、

「初めまして、私はキキョウです。お料理係をしています。皆さん、ハツカ様との旅、楽しかったですか？」

キキョウの自己紹介が始まった。

うん、何でいるの？

あと顔怖いよ。

笑ってるはずなのになんか怖いよ？

第一印象ってすごく大事でね？

「…キキョウちゃん、どうしてここに？」

「いつも通りハツカ様のお部屋におじやまし、頼まれてた整体術を披露しようとしたところ不在だったので…」

あ、やっべ忘れてた。

蝙蝠（の姿で握られたり）ばっかりだったから体バキバキなって頼んだのよ。

「ごめん、忘れてた。今ちよつと忙しいから後でも良い？」

「分かりました。では夜におじやましますね！」

…
何で所々強調するように言うの？

「わざわざありがとね」

「いえいえ、こちらこそ…」

「子供の前でやめなさいよ！」

…え、なにが。

えろマツサージじゃないよ？

☆☆☆

「じゃ、終わりで良い？ はい、解散」

「ハツカはならないのデスカ？」

あ、ごめん忘れてた。

「魔王軍トオカカン、ハツカ。御存知されちゃった通り偵察します、よろしく。質問は無いね、はい解さ…」

「なんで白いんだ？」

「なんで白いのよ？」

「なぜ、白いのでしょうか？」

「あ、あの、なんで白いの？」

「どうして白いのデスカ？」

「…」

絶対聞かれると思った。

勇者と久々冒険

サイジャクさんから依頼が来た。

「つてことでその洞窟が危険らしいから肅清、よろしくな」

洞窟と呼ばれる洞穴がある。

前に勇者が言つてたダンジョンでは違い、定期的にモンスターが排出されるわけでは無いのだが、勝手に野生のモンスターが達が住み着いてしまつてできた、穴ぼこのことを言う。

基本的に野生のモンスターさん達も魔王軍の間のも達と敵対しない優しい奴らなんだけど、時たまちよつと生意気な奴らが集つて、

「魔王軍とか調子乗つてるよな」

「わかるそれ。集団心理で強い気なつてさ」

「あー！ 良い事思いついたわー。俺らでもう新しい団体作らね？」

つて感じで調子乗つてるのはお前らの方だよ、な方々が集つてしまふ『高校の文化祭でバンド組んだり、大学生がノリでサークル作つてしまふ感覚』で起こつてしまふ現象だ、つて本に書いてあつた。

そんな害悪ではないけど、居たらちよつとウザい、民度が低いから何とかしてほしい、つて声が多々寄せられるので面倒だが注意しに行かなくちゃいけない。

そんな時期に丁度いい駒、基、適任の勇者様がいたから依頼したらしい。

ほほー、勇者さん久しぶりの依頼ですね。残念ながら討伐とかじゃないから気を付けてくださいね。

「質問は無いn...」

「首輪は？」

勇者が不安そうに聞いた。

「... 大丈夫大丈夫、そのも全然魔素濃いから閉まらないって！...
多分」

「だってさ、よし行こうか！」

「ちよつと待ってね!? 僕ら意外と死の危機にあるみたいだからさ
!？」

出発するのに30分かかった。

城からしばらく移動し、洞窟の入り口に着くと見張りつぽい下っ端
が絡んできた。

「お!?! なんだおめえら！ 俺らの秘密基t... アジトに何の用だよ
！」

今秘密基地って言おうとした。慌ててアジトって言い直したけど、
それでも十分カツコ付かない。

今のところ魔素濃度が足りているのか、首の閉まってない勇者様が
言った。

「僕らは魔王軍の遣いだ。君らが最近おふぎけが過ぎるようだから注
意しに来たよ」

「んだ？ 生意気だな」

勇者の話を知ると気分を害したのか、ゆっくりと立ち上がり、

「やっちまえー！ おめえらー！ ……？ あ、ああ、そうか。今日の見張りは俺一人だった。行くぞ、てめー！」

下つ端見張りが勝負を仕掛けてきた！

「トウヤ？ 今回の相手はあくまで悪いやつじゃないからね？ いくら君の力が落ちて来てるからと言って本気の勇者スラッシュとかやめてね？」

「ハツカ、僕を戦闘狂かなんかと勘違いしてない？ 僕はあまり戦いが好きじゃないんだよ？ どうしてそんな誤解が生まれたのか分から…。」

「ごちやごちやうるせー！ クタバレ侵入しゃ…。」

「勇者スラッシュ！！」

「おい！」

「ぎゃー！ー！！」

光の斬撃が飛んで行った。

「やらないでって言ったよね！ どうしてやっちやうのさ！？」

『『本気でやるな』って言われたから中威力でやったんだよ？』

御託勇者め！

「い、ってーな…。。ちくしょう…。」

生きてる！ 良かったー。

「お陰で片足吹き飛んだぞ…。」

でもあんま大丈夫じゃなさそう！

「僕らには僕らの任務があるんだ先に進ませてもらうよ」

怪我人に追い打ちをかける勇者。

「あ!?! あー、もう好きにしろよ…。」

拗ねちゃった子供みたいになってんじやん。

「うん、そうさせてもらうよ」

そう言つてズラズラ進んでいく勇者一行。

え、この人放置？ 死んじやうよ!?!

「ハツカー、行くよー」

「あ、うん…。 師匠、回復だけお願いできますか?」

「えー、しょうがないデスねー。【回復魔法・小】！ これで良いデスカー?」

「うん、ありがとう」

「おいコラ待てよ！ なんで小なんだよ！ どう見てももつと大怪我してんだろ！ おい！ おーい！」

さ、洞窟探索始めてみようか。

☆☆☆

「ぎゃー……いゃー……無理無理無理！」

見張りの脚をぶった切って侵入したのは良いけど、大変なことになるってしまった。

「良い匂いがするわー！！ 貴方蝙蝠よねー！！ わたし蝙蝠って大好きなのよー！！ ねえ、食べさせてー！！」

「ふざけんじやないわよ！ なんで蜘蛛が蝙蝠喰うんだよ!? 自然の摂理護理やがれです!!」

絶賛、^{アラクネ}蜘蛛女に追われています。

「トウヤー!? トウヤサーン!! すんません、助けてほしいですー!!」

俺が丁寧をお願いしてるってのに、

「ごめーん。無理かもー」

なんでなんだ!?

「ほらー、僕も、蜘蛛の巣に……」

ちらっと見るとまんまと蜘蛛の巣に引っかかっている勇者が1人。ふふ、ウケる。

……じゃなくて!

「お茶目勇者か！ シイノサーン！ 勇者が全然ダメなんでお願いしまーすー!」

「そ、そこまで言わなくても…。」

頼れる弓使い、シイノさんのお通りだ…

「あ、ハツカさん。ごめんなさい、私唯一蜘蛛が苦手です…。」

「そうですか！ 無理言つてすみませんでした！」

畜生！ 完璧に見えて意外な弱点がある人って良いよね！

「師匠く！ 弟子のピンチです！」

「そうデスカ！ やつとオレの出番デスカ！」

おお、流石師匠！

「今そつちに行くのデス！」

颯爽と駆けつけて来てくれました。

助かります！ でも…！

「あ、師匠！ その辺にも蜘蛛の巣があ…。」

「あ…。」

「…るから気を付けてくださいねそうですね早く言えば良かったです…ね！」

お茶目師匠！

マジかい！ この勇者パってばこんなにもネタキャラぞろいだっけか!?

… 着弾しそうで怖かったけどもう仕方ない！

「リリカさーん！ 助けて下さーい！」

… 返事がない。

「あ、あれ？ リリカちゃん!?」

「ハツカさん、大変です！」

「どうしました!?!」

「全然頼られないからって、リリカちゃん拗ねてます！」

ネタパ勇者が！

「まあ、アタシらは出番無いわよね」

「… ない」

「… あっちで遊びましょうか」

「… あそぶ」

ふざけんなあそこの2人！

☆☆☆

「リリカー！ リリカちゃん！ リリカ様!?! お願いです、助けて下さーい！」

そうお願いすると、顔を岩場からヒョッコリ出してくれて、

「ふくん。でもハツカさん。ボクのこと何番目に…。」

「え、4番目ですね…。」

スツと岩陰に隠れようとし…

「ああー!! ちがつ! 本命! 大本命! 真打! 美味しいものは最後に食べる主義で!」

戻って来てなんかこっち見てニヤニヤしてる。

もっと欲しそうな顔してるけど今ホントに余裕が…

… あっ!

「「あ」」

… はい、躓いて転びました。

そんなチャンスを逃すはずもなく、蜘蛛さんが、

「ねえ、蝙蝠さあん? もう疲れてきたんじゃない?」

「ぜ、全然!! まだまだ元気だし!」

じつくりゆっくり追い詰めてくる蜘蛛さんに完全に腰が抜けてしまった哀れな蝙蝠。

そんな姿を見たアラクネは、

「さあ、早く私の中で寝むりなさあーい!!」

一気に走ってきた!

「い、嫌だ! こんなところで野宿なんかしたくな…!」

「ハツカさんと、寝るのは…。」

詠唱・着弾、その轟音。

「…ボクだよ」

意味が違うよ…。

けどありがと助かった！

アラクネの動きが止まったのを見て俺は意識を手放した

☆☆☆

…あ、あれ？ 洞窟は…？

目が覚めると見慣れた天井。勇者宅だった。

「あ、起きた？」

目が覚めた俺を覗き込んでいるのは、

「…トウヤ(笑)」

「うん、ごめんて…。」

簡単に話を聞くと、俺が気を失った後コレと言った強敵は出てこ

ず、とりあえず1発ずつ入れたら皆大人しくなってくれたという。

そ、そうか…。その1発がどのパーツの損傷なのか気になりはするけど、今は良いだろう。

依頼の完了を城に報告に行くと俺はかなり心配されたらしい。

そ、そっか。

俺も、強くなんなくちやな…。

そう心に決め、体を起こした。

その日、リリカと顔を合わせてもらえなかった。

「ふん…。」

「…ふん」

ついでに2人にも。

勇者と修行

「あ、ねえトウヤ。もしよければうちの兵達と手合わせしてもらえない？」

「え…。」

「ああ、嫌だったら全然断ってもらっていいんだけど…。」

この前サイジャクさんが勇者の弱り具合を確認しに来たことからこの話は始まった。

サイジャクさんが、

「見ろよハツカ！ あいつ等あんなに弱って！ あっはっはっははははっゴホッ!? ボヘッ!? オエッ!? アアアアア完全に咽た…。」

…んお？ てかさー、今ならうちの兵士達のいいトレーニングになるんじゃない!? よし、勇者も呼んで合同トレーニングってことにして一方的に蝟殴りにしよーぜ！」

って言ってた事から勇者一行を除く、重要役人たちで話し合いが行われ、勇者に無断で決まってしまった。

サイジャクさん、どれだけ勇者一行に鬱憤溜まってたんすか…。」

「…わかった。戦いとはいえ魔王軍の兵士達には悪いことしちゃったからね」

おー、流石勇者、やさしい。

「全盛期と比べたら力も落ちてるだろうけど、そんな僕で良けれ

ば…」

「みなさーん、おつけーだそうでーす！」

「…へ？」

「「よっしやー！！」」「「殺すぞー！！」」

うん、皆やる気だね。向上意欲があるのはいいことだ。

「え、え、あ、あれ？　だ、大丈夫なの…？」

「え、大丈夫つしよ…あ、ただ回復したばかりな方々ばかりだから、死なない程度でお願いしますね？」

「僕が死にそうなんだけど!？」

勇者がそんな事言い出した。

「またまたく」

「本気なんだけど!？」

流石勇者さんだぜ。勇者ジョーク言えるほど余裕だとは…。

「死に首晒せー！！」

「あんときの恨みー！！」

「なんとなくてー！！」

「彼女に振られた!!　畜生ー！！」

「関係無いのあるよね!?　僕、サンドバッグじゃ無いんだよ!？」

とか何とか言いつつ、

「ゆ、勇者スラッシュ!!!」

「「ぎやああああー！！！！」」

流石勇者、未だその力は衰えないね。

「よーし！ もっと来い！！」

やっぱりあいつも戦闘狂か。

☆☆☆

勇者の無事が確認できたから一安心。

さて、俺が弱すぎるのが証明されたから俺も修行しよっかな。

… 前回みたいのはもう嫌だからね。

早速気になってたシイノさんの弓裁きを習おう。

ってことで家に侵入。

「おじやまします」

「あら、今日も来たの？」

「まあ、一応お世話係だからねー。てか、シイノさんいる？」

「シイノ？ ああ、あの子なら今日も市場に出てると思うわよ」

好きだねお買い物。

「わかった、ありがと。じゃあ、弓を習って…」

「は、ハツカさん！ ぼ、ボクが魔法を教えるよ！」

市場に行こうとしたのだが、通せんぼされてしまった。

「あ、えっと。俺、弓が…」

「あ、魔法はね凄く便利だよ。色々使えるし、継続時間も凄くてね!?!
あ、ほら、今もまだハツカさんとの【契約魔法】は切れてないんだよ
!」

そうなんだ、魔法便利だね。

そんでまだ契約は切れないの？

「…そっか、じゃあ折角だから教えて貰おうかな？」

「う、うん！ じゃ、じゃあこっちに…」

手を引かれ、家の庭に行こうとしたところ、

「良いですね、魔法。私も興味あつたんですよ。ぜひ私にもご教授願
いたいですね」

「っ!? お料理、係…!?」

「キキヨウですよ？ いい加減覚えてほしいです」

キキヨウちゃんがやって来た。

なんか、悪役の登場みたいでカッコいいな…。

「…そっか、ごめんね、キキヨウちゃん。でもボク達、今から魔
法の修行で…」

「あら、そうなんですわー、でもごめんなさい。ハツカ様はこれから私
とお料理の修行を約束して…」

おいこら、勝手なこと言うな。

そんな約束した覚えはないぞ。

「…ねえキキヨウ。俺そんな約束した覚えが…」
「し、しましたよ!? は、ハツカ様ったら憶えてないんですかー」

そ、そうだったのか…！ 全然覚えてない。

俺は全然覚えてないのだがキキヨウがそう言うのできつとそうなんだろう。

今は何故か棒読みが酷いキキヨウだが物覚えはすごく良いからね。

…いや、俺料理する機会無いけど。

「ねえ、やっぱり俺、お料理習うメリットがあんまり…」

「お料理は良いですよ！ 作るのは楽しいですし誰かに喜んで貰えま
すし、頭も撫でてくれ…いえ。あ、あと多分モテますよ？」

確証はないのか。

いや、それよりも、

「でも俺がお料理作れるようになったらキキヨウの作ったの食べれ
な…」

「それもそうですね、ではお料理教室はやめましょう」

あと楽しんで食べるご飯ほど旨いものは…あれ？ 中止？ なん
だ、言い訳はもういいのか。

「それじゃ、キキヨウも魔法を習いに行く？」

「あ、あの…」

「そうですね。是非お願いします」

そう言つて本とペンを取り出し、

「…あ、見てくださいこれ！」

なんか偶々思い出したかのように言つた。

「な、なに、これ〜？」

「これはですね、私とハツカ様の思い出の品、お揃いの羽ペンです！」

キキヨウが取り出したのは何時ぞやの『きやんペーン』で貰えた羽ペン。

懐かしいな。

俺まだ箱から出してなかつたよ。

お揃いつて言つても『きやんペーン』に参加した人ならみんな貰えたはずだけど…。

「あゝ、そうなんだゝ、いいねゝ。でもマウント取つてるところごめんねゝ。魔法の訓練はマンツーマンでやった方が効率良いんだよゝ」
「そうなんですネ。なら私から教えて貰つていいですか？ ハツカ様が分からなくなった時、私からも教えればそれこそ効率が良いのでは？」

「ごめんねゝ、お料理係さん。ハツカさんと先に約束してたからそつちを優先したいなゝ」

わあお、2人とも熱意がすごいですねえ。

なんか、忙しそうだから先シイノさんところ行つてくるね。

「あ、それなら俺弓を…」

「それは良くない」です」

そうなんすね…。

…なあ、おかしくね？　こういうイベントはあつちのハーレム勇者に起こるんじゃないの？

人間性を変えてしまうほどの魔素の吸い過ぎってのは恐ろしいです
すね。

「お！　ハツカ、どうしたんデスカ？」

遠目で2人を眺めているとハルコちゃんがやって来た。

「ハルk…　師匠。あーつと…　今からシイノさんに弓を教わろうかなって」

「それなら丁度良かったデス！　オレも行こうとしてたのデス！」

「力がドンドン無くなってしまって言うのに特訓するのか？」

「力は無くなっても技術が落ちるわけでは無いデスから！」

「なるほど、じゃ一緒に行こうか」

「ええ！　師匠に付いてくるのデス！」

家を出て真つすぐ歩こうとする。

「あ、こっちだつて」

「…」

「いたっ!？」

道間違えたの恥ずかしいからって叩くのやめませんか？

勇者対魔王軍 真剣勝負

「あ、そういえば俺が旅の途中で食べさせてもらった、あのサクサクパサパサの甘い食べ物って何て名前?」

「サクサクパサパサの甘いの...?」

旅の思い出の品、あの時はツンデレて嫌って言ってたけどなんかまた食べたくなったんだよね。

「... あー、もしかして『クッキー』のこと?」

『くつきー』?

「なに? また食べたいの?」

「あー、うん。できればまた食べたいかなって...」

「あらそう、それならシイノに頼...」

「私にお任せください!」

つてキキヨウちゃんが飛んできた。

「ハツカ様、食べ物的事ならお任せください! 女将さんの元で修業したとき一通りの物は作れるようになったので!」

すげーな、女将さん。

今度その食堂行ってみたいな。

「そっか、それならキキヨウに...」

「... それには及びません」

だ、誰だ!?

「他のお料理ならまだしも、クッキーは、クッキーだけは譲れないものがあるのだ…！」

凄いな、クッキーガチ勢じゃん。

クッキーガチ勢シイノさんが何処からともなく颯爽と現れた。

「ス○ラお婆さんの、誇りをかけて…！」

…？

…ん？ なんてった？ よく聞こえなかった。もっかい言っ
て？

「…ごめん、何お婆さん？」

「ス○ラお婆さんですよ？」

???

ス、ラはちゃんと聞こえるんだけど、その間がよく聞こえない。なに、なんて？

「ではそのス○ラお婆さんには悪いですけど、私の方がうまく作れますから…」

「そんなクッキーのような甘い気持ちじゃ（激うまジョーク）、ス○ラお婆さんには敵いませんよ？」

俺だけなのか!? 俺の耳だけがバグったのか!?

「なら…」

「尋常に…」

「…勝負です!!」

バトル作品かよ。

「てかアンタ今日も来てるのね」
「もう慣れたでしょ」

… っでことで始まりました！ クッキーコンテスト！
司会はワタクシ… あー、もういいや、めんどくせ。

はい、早速実食！

まずはキキョウちゃん。

「では私の方から…」

そう言っで出したのは良く知らないけどシンプルなクッキー。
… これがノーマルタイプなのかな。

食べてみましょう。

「…美味しい」

「ホントですか!? 良かったです」

「あら、普通においしいじゃ…」

「ハツカ様！ まだまだあるのもっと食べてください！」
「うん、おいし…」

「どうですか？ ハツカ様？ 美味しいですか？」

「…」

「美味しい」

「美味しいデス」
「…」

うん、満場一致で美味しい判定。

はい、じゃあ次い！

「お待ちせしました。ス〇ラおばさん直伝、ス〇ラおばさんのクッキーです」

名前はそのまんまなんだね。相変わらず聞こえないけど…。

シイノが持ってきたのはクッキーに黒茶の粒々が練りこまれてるタイプのクッキー。

こ、これは…？

「シイノさん、これは？」

「やはり魔物文化にはないのでしょいか？」

「これはですね、『チョコチップ』というものです」

うん、知らない。

「そもそもチョコとはですね…」

説明されたけど、長いしよくわからなかったから割愛。

とりあえず頂きましょう。

「ん！ 美味しい！」

「ホントですか!?! 良かったです！」

うん、ノーマルとはまた違った、その…ね！ ちよこ？ が何ともいいアクセントになって…。風味が、調和され…。？ 美味しいね！

「うん、美味しいよー！」

「いつもの味ね〜」

「美味しい〜」

「美味しいデス」

「…」

さあ、両者のクッキーを食べてみましたがどうでしょうか。

やはり、どちらも甲乙つけ難…

はい、ありがとうございます。よくわかりませんでした。

「それで、どうでしたか。ハツカ様」

「どちらのクッキーがおいしかったでしょうか？」

「え、俺が決めるの？」

審査員長ごっこはしてたけどガチ審査はできないよ？

助けを求めるためチラリと勇者たちを見る。

(どっちも美味しい、だけはダメだぞ…)

(どっちも美味しい、だけはダメよ…)

(どっちも美味しい〜)

(どっちも美味しいデス)

(…)

な、なんか最近聞こえなかった声が聞こえるような気がする…。

ははーん、分かったぞ。
大丈夫だ安心しろ。お前らの思考はちゃんと読み取れたからさ。

…
多分。

「うん、どっちも美味しいよ」

「おいー！」

急にトウヤとミサが立ち上がったけど、どうした？

「…引き分け、ですね」

「ええ、私もまだス〇ラお婆さんの味を完全に伝承できていなかった
ということでしょう…」

(いいんだ…)

(それでよかったの…?)

(どっちも美味しい)

(どっちも美味いデス)

(…)

「次は負けません」

「私だって次までにはス〇ラお婆さんの味を完全に…！」

と、なんかいい感じに決着がついた。
良かったね。

まあ俺、馬鹿舌だからクッキーの良し悪しもよくわからんけど。

そして何者なんだ、ス〇ラおばさん…

幼女と和解せよ

いい加減、幼女と仲直りしようか。

いや、喧嘩してるわけじゃないけどさ？

改めてよろしくの自己紹介が終わってからの日々も相変わらず幼女ちゃんに無視され続けている。

「…」

「あ、ちよ」

「…ぷい」

それは朝だろうと。

「ね、ねえ」

「…ぷい」

「…」

それはお昼ごはんの時だろうと。

「はい、お城からパン持って行って言われたからどうぞ」

「…ぷい」

「パンは持ってくのね」

それは勇者宅にお泊りした時の夜中も。

「…おきて」

「ん、んー…。なにー?」

「…ぷい」

「…え、ホントに何。何で今俺起こされたの」

いい加減自分が犯罪者なんじゃないかって錯覚してきたからそろそろどうにかしないと…

「つてことでどうしたらいいと思う!？」

「いや、だれ…?」

偶々街で見かけた友達に聞いてみることにした。

勇者宅の近くにある空き地に机と椅子が置いてあり、休憩できるようになっている。

そこに偶々友達が休憩してたから相談に乗ってもらうことにした。

「それでね、クッキーって言うお菓子が凄く美味しくてね?」

「おいさつきと言ってること違うじゃん! 子供の話はどうしたんだよ!。そしてお前誰なんだよ!」

さっすがマイフレンド。軌道修正もしっかりしてくれる!

「おつとそうだった、ありがとねゾリエル」

「誰だよゾリエルつて! 気持ち悪い名前だな!。そしてお前誰なんだよ!」

「でねモリオカ、その子供が俺と全然目を合わせてくれないんだけどさ、昨日起こされてまで「ぷい」つてされたんだよ?」

「だから知らないつて!。あとそれどういう状況だよ!。そしてお前誰なんだよ!」

「折角いい夢見てたのに〜」

「夢に逃げるな！ 現実を見ろ！ そしてお前誰なんだよ！」

「うん、そうだよ。ありがとうクリップ。俺そうしてみるよ」

「まだ大したこと言ってるねえよ！ もっと良いこと言いたいから待てよ！ あとさつきから呼び方変わってるぞ！ そしてお前誰なんだよ！」

「ちよ、そんな大声出したら近所、いや違う金魚迷惑でしょ？」

「お前が原因なんだよ！ あと近所で合ってたのになんでわざわざ金魚って言ったんだよ！ 脳内水族館か！」

「…？」

「なんか言ってくれよ！ おれがやべえ奴みたいじゃん！」

「…魔王様って、何歳なんだろう？」

「いや、そっちかよ！ いや、そっちかよじゃねえよ！ そんな話してなかっただろ！ 王様に年を聞くのは失礼だって雑誌に書いてあったぞー！」

「ああ、そっか今日は20日だ…」

「28日だよ！ さつきから話題振つといて無視してんなよ！ どうでもよくなるつつあるけど、お前誰なんだよ！」

「…ねえ、もう帰っていい？」

「おれが呼び留めてたみたいに言うなよ！ お前さんから来たんだろ！ てか最初の相談はもういいのかよ！」

「疲れたからもう帰るね。今日はありがと。じゃまたー」

「え、あ、おう。またなー」

「…いや、誰だったんだよ！」

すっかり話し込んでしまったようでもう陽が傾いてる。

おれは飲みかけのドリンクを飲み干し、

「…なんか、楽しかったな」

帰路に就いた。

☆☆☆

「…さっきの誰だったんだろ。こわ。早く帰ろ」

友達だと思って相談してたら違う人だった。

なんか怖いからトウヤに報告しよ。

「おじやましまーす、トウヤーいるー?」

「おー! ハツカ! ちようどいいデス。オレに乗るのデス」

「トウヤはいないのか。てか師匠、俺乗って師匠歩けるの?」

マイペースに会話を進めるハルコちゃんの良いとして、師匠とはいえさほど重くは無い俺が乗ってもダイジョブなのか?

グエってなんない?

「蝙蝠でデス! なんで人間のハツカを持ち上げなくちゃいけないデスカ」

「あー、なんだ。蝙蝠ね」

言われて蝙蝠の姿になる。

なんか久しぶりだな。蝙蝠の姿でハルコの前に出グエツ!?

「さ、行くデスよ!」

乗れって言ったよね! いきなり握らないでよ!

雑に運ばれ着いたのは渦中の幼女のお部屋。

「持ってきたデスよー!」

持ってきたって言うな、連れてきたって言え。実際持ってきたんだ
けど。

「…ごうもり」

解放されたかと思うと直ぐに少女に捕まってしまった。

「良かったデスね、ペットが帰って来て」

は？

いやいや、ペットって。

確かに君くらいの年で1回動物に興味を持つらしいけどさ？

それにしてももつといるでしょ。ワンちゃんネコちゃん、ニンゲン
ちゃん。数多い中なぜに蝙蝠なのでしょう…。

趣味悪いっすね。

てか年下のペットになるってどんなプレイですか。

「…ごうもり」

もしかして好きな玩具を取られて不機嫌になってる子供、みたいな
感じだったの？

なら蝙蝠に成れって言うてくれればよかったのに…。

いや、言われたらやりたくないか。

結局その日、人間に戻れずに勇者宅でお泊りすることになった。

言うまでもなく幼女、『ユウカ』に握られっぱなしだったので、消えかけてた痣は復活した。

… それと、勇者方。子供達が寝てるんだ。『お楽しみ』はもう少し音量下げなさい。

勇者との決別

その日、勇者に技を使ってもらったんだけど、

「勇者スラッシュ!! … あ、あれ?」

何回やろうと出ることは無かった。

「サイジャクさん。勇者たちの力、完全に抜け落ちたみたいですよ」
「やつとか、結構時間かかったな…。」

故にこれをもって、

「そんじや、勇者たち解放してやるか」

勇者御一行の軟禁生活が終わりを告げる。

「… はい、伝えてきますね」

☆☆☆

「ってことなんで、勇者さん達の拘束はもう解けました。この首輪ももうとれるはずですよ?」

「「え…?」「」」

「今までお疲れ様でした。明日、御国まで送り届ける手はずとなって
るので、今日は荷物をまとめておいてくださいね。」

あ、持てなかったら手伝うんで」

試しにハルコの首輪に触れるとポロツと意図も簡単に解けてし

まった。

「それじゃあ、お引越し作業始めましょ」

☆☆☆

「え、えっと。ハツカ？」

黙々と引越し荷物をまとめる俺とは対照的に勇者一行はサボりな
のか中々作業を始めない。

おい、力が無いにしても何かしらなることはあるだろ。

「はい？」

「僕たち解放されるのか？」

「そうですよ、おめでとうございます。長い拘束から解放された時の
解放感はずいぶん良いですよ」

「もう、ここに、居てはいけないのか…？」

「当り前じゃないですか。ここは魔王軍の城ですよ？ 敵地で悠悠暮
らす勇者さんがどこにいるんですか」

手は休めずケラケラ笑う。

「と言うかお国に帰ったら怒られるんですかね、折角頑張ったのにそ
れは可哀想ですね」

「ハツカ」

「あ、なら人目の付かない境辺でスローライフ、なんてどうですか？」

「…ハツカ」
「良いっすねー。引退勇者の自給自足生活。浪漫があります。羨ま
し…」

「…ハツカ！」

「うわっ、びっくりした…」

ど、どうしたんすか。急に」

「なんで… なんて、なんだ…？」

「…はい？」

横目で見ると勇者は震え、涙を流していた。

「なんで俺は急にできなくなっただ？ 昨日までは普通に…」

「今あるものがこの先もずっと、なんて夢物語ですよ。いつ無くなっても良いようにしておくものです」

「… なんでさつきから敬語なんだ？」

「だって、もう必要ないじゃないですか。これ以上心の隙間を埋めようと明日にはお別れですから、無意味です」

「… なんて、どうして泣いているんだ？」

「さあ？」

… 別れたく、ないんじゃない…？」

☆☆☆

「すみませんでした。お見苦しいところを…」

「い、いや…」

「あ、でも安心してください」

「…？」

「もうすぐ、ここでの記憶も消えますから」

「… え？」

「いやいや、当り前じゃないですか。引退勇者とはいえ敵地の内部を知っているとダメっすもん。もし国王さんにでも教えたら広まるのは一瞬ですよ？」

泣いてたところを覚えられたままなのも恥ずかしいから良かったよ、と安堵しながら説明する。

☆☆☆

「記憶の消去が行われるのは今日の夜らしいんで家にいてくださいね？」

「あ、ああ」

「それじゃあ、そういうことで。皆さん、短い間でしたけどありがとうございます」

「ほ、僕も楽しかったよ…」

「…ええ」

「…はい。お世話に、なりました…」

「…」

「…」

「…」

引越準備と詳しい説明、別れの挨拶も終えたので家を出た。

後は城に戻って、説明を終えたことをサイジャクさんに伝えれば終わりなのに、

「ハツカ！」

「なんですか、ハルコさん」

呼び止められてしまった。

「…！ オレの事は師匠と呼べと言ったはずデス」

「ああ、ありましたね。そんなこと」

「そ、そうデス！ デスからオレとハツカには…」

「でもあれ、【契約魔法】の延長ですよ？」

「…え」

「なんで俺が人間の弟子になんかなんなくちやいけないんすかね？」

「…え、だ、だって…」

「それに俺、師弟とか望んでないですし」

「や、やだあー…」

「その契約も切れましたし、もう終わりだって言いましたよね？」

「やだあ、いやだあー…。ハツカあー…」

「さよなら、ハルコさん」

「あああ…。あああああーやーだあー…。いっちゃん、やだああー」

泣き声も無視して先を急ぐ。

☆☆☆

「…」

「… なんてでしょうか」

今度は大通り、人目の多いところで捕まってしまった。

「…！」

脚を掴んだユウカの手はさらに力を強める。

「あの、離してくれませんか？ 俺まだやることあるんですけど…？」

「… いや」

「嫌、じゃなくてですね？」

いい加減離してほしいんだけど、最後でわざわざ傷付けるようなこ

としなくないんだけど。

「ほら、離してください。振り払ったで怪我して欲しくないんですけど?」

「…!」

おい。いい加減に…!

… 落ち着こう、怪我させて嫌な気分になるのは俺だけだ。後味悪いのは嫌いだ。

冷静になったことで簡単な突破口が見つかった。
脚の拘束を気にせず、蝙蝠になる。

「…あ」

それだけで簡単にユウカの拘束は解けた。

人間に戻り伝えたいことを伝える。

「それではまた。蝙蝠なら夜になるとその辺飛んでるんで適当に捕まえたらいんじゃないですか?」

☆☆☆

「ハツカさん!」

「…なに」

城の入り口。

また呼び止められた。

もういい加減に諦めてほしい。

「ボク、ここでのハツカさんとの記憶。無くしたくない」

「ダメだったて、さつき何度も教えましたよね」

「…！」

「… なんですか、杖をこっち向けて」

「撃つよ」

「は？」

「撃つよ、【契約魔法】」

「… 撃てるわけねえだろ」

「撃てるよ」

「撃てねえんだよ」

「撃てるって…」

「撃てねえ!! つつってんだろ!!」

「っ!？」

つい、荒々しい口調になってしまう。

「あー、説明何度もさせんなよ。めんどくせー。

あのな? そこに首輪が無い時点でもうお前らに力も魔力ももう残ってないんだよ。わかる?」

「そ、それでも… 撃つって、言ったら…?」

「おい、やめろって。魔力が空の状態で魔法撃つとどうなるのか、お前から教わったんだぞ?」

魔法は魔力が無くなっても体力を消費することで撃てるらしい。

まあ、そんな状態で撃てば当然…。

「…！」

「あ、っそ」

「… 撃つ、前に、ひ、1つ… いい?」

「…なんすか」

「ボクね、本気で…ハツカさんが…すk…」

「…【契約魔法】」

「!？」

「【契約内容：本日中限り魔法使用の禁止】」

俺も散々お世話になった(?)この契約魔法、なかなか便利なもので。

「止めましょうよ、ホント、身体に良くないですよ…」

相手が完全な同意の状態か、相手の魔力が空の状態だと掛かり易い大変便利なもの。

契約内容にもよるけど。

「あと、その気持ちも、きっと勘違いですよ?」

まあ、これも目の前の子から教わったことなんだけどね。

「じゃ、そういうことで」

「ハツカさん…」

泣き崩れる少女を放置し、

「さよなら」

城に戻り、

速足で歩き、

「おお、ハツカ、実はな…」

「すまん、あとで」

「え、いや、ああ、おい…」

偶々出会ったヨウカの声も無視して部屋に戻る。

「はぁー…」

部屋に戻るや否や、

「っっ…ら!!」

思いっきり叫んだ。

「ふざけんな、ふざけんなふざけんなふざけんな!!」

各々個人部屋、いろんなことをする機会があるだろうから防音使用にはなっているから大丈夫だと思っけど…。

「なんで俺にこんな役押し付けたんだよ!!」

「どうして俺がこんな思いしなくちゃいけないんだよ!!」

「あー! もー!! マジふざけんな!!」

「あと俺カッコつけんなよなー!? くそだつせー!! なんだあのキザッたるいやつ!! 気持ち悪いーんだよ!!」

結局、喉が枯れるまで叫んでしまった。

「… あー、あー。うん、喉痛い」

生まれて初めてかもなこんな声上げたの。

「はあくく…」

ため息をつき、窓の外を見る。

別れが辛くなるからキツパリ別れた方が良く、とアドバイス貰ったから実行したけどホントにあれで良かったのか？

もつと辛かった気がしたけど…。

「… よし」

そして今後の目標を決めたところで行動を開始す…

「ダメです!!」

「ハグッ!!」

「だ、ダメですよハツカ様!」

いきなりキキョウに怒突かれた。痛いんだが。

「え!?! な、なにが!?!」

「近隣住民の皆さんに迷惑かけたって追放扱いにはなりませんよ!?!」

「え、え!?! ちよ、ちよおつと待って!?! なんで俺そんな迷惑異端児みたいなことしなくちやいけないの!?!」

「だ、だって、さつきハツカ様、何か決めたようなような顔で窓の外見てたじゃないですか…」

「え、うん」

何時から見てたんだろ、この子。

「それで…」

「あ、ごめん、テラスでクッキーでも食べようかなって…」

「…え？」

落ち着くために一旦クッキーでも洒落込もうかなって…。

ほら、なんか黄昏たい気分ってあるじゃん…？

「な、なんかごめんね。勘違いさせちゃって…。あ、一緒に食べる？」

「…お茶、淹れてきますね」

恥ずかしそうに部屋を出た。

☆☆☆

「うつま！ お茶とクッキーめっちゃ合うじゃん！」

「そ、そうですか…。良かったです…」

「うん、ありがとね。」

…っは！ もしや、蝙蝠の姿で食べればより多く食べれた気に…！? い、いやしかし、人間の方が味覚がしっかり…」

「あ、あの…！」

美味しいお茶と共にクッキーを齧っていると気まずそうに聞いてきた。

「どうしたいんですか、ハツカ様は」

「…野暮って言葉、知ってる？」

「…」

俺は知らん。どういう意味？

この前見た作品で『野暮ってもんだろ…』って台詞があったから使ってみただけど、どういう意味なんだろ…。

多分使いどころは間違ってると思うんだよね。

キキョウにはそれで伝わったみたいだし…
賢いねこの子。
よしよし、えらいですね。

何となく頭を撫でてしまう。

「…!? ど、どうしたんですか、急に…！」

「あ、ごめんね。なんとなくで…」

ホントに何やってんでしようか、俺。

「な、なんでもいいので続けてください！」

「あ、はい」

懐かしいな。シロちゃん時代ではこんな風に、もみくちやにされてたような…。

その影響なのか？

…。

な、なんだろう…。完全に絆されたと思ってたけど、今思い返すと、この嫌の記憶だけはなんか許したくない…。

…
なんか、ムカムカしてきたな。

畜生、仕返ししに行きたいけど、カツコつけちゃったし、なんか色々やっちゃったせいで今から行くのすげー恥ずかしいんだけど…。

ど、どうしよう。

「おまえら、いつのまに、そんな、仲に、なったんだ？」

「!？」

別に疚しいことしてたわけじゃないけど、なんかびくってなった。

「び、びっくりした…。どしたの、ヨウカ」

扉を開けて固まっていたのは白牛、トオカカンのヨウカさんだった。

「さつき、声かけたが、あとで、って言われたが、緊急、だったものでな、そしたら…。ああ、発情期か、どんまい」

「まだ来てねえよ」

思わずダンツと机を叩いてしまう。

誰がハーレム勇者じゃ。

「おや、そうか、黒白、気を、付けろよ、そいつの、発情期は、なかなか…。」

「ねえ、それ今言わなくちやダメ!？」

勇者のこと馬鹿にできなくなるからやめてほしいんだけど。

「…。いつでも、お声がけを…。」

「何言ってるのこの子」

呪学、学ぼ。

「そ、それで御用件は？」

羞恥プレイとか趣味じゃないから、とつとつ話を切り出せ。

「ああ、そうだった…。」

ヨウカから衝撃発言を頂いた。

「な、なんと…。」

「ああ、それとな」

ヨウカに無暗に女性の頭を触ってはいけないと教えられた。

「な、なんと…。」

そ、そうなのか…？

ハーレム勇者はいつもしてたけど？

見て覚えるのは良いにしても人を選ばなきゃなのな。

なっかなおりーのおまじないー

… どおおくくしよおおくく。

い、嫌なんだけどくく…。

また勇者たちに会いに行くの恥ずかしすぎて嫌なんだけどくく…。

「あ、あの…。私も一緒に…。」

「だめだぞ、てを、かしちや、ふふふ、くるしめ」

くつそ趣味悪いなコイツ。

あー…。しょうがない…。

腹とか色々括って行くかー。

行きたくねくく。

☆☆☆

さつきやつちやつたばかりだから、来る途中の道もキツかったぜ。

3人との思い出が蘇る道を歩くのはキツかったし、なによりそのこと思われるところに涙の水たまりができてることを知った時は泣きたくなかった。

そんなこともあったが何とか到着。

何度も通った家の前に立ち、深呼吸。

何時かのように控え目ノックする。

う、うん、だ、大丈夫……。多分。

この先の展開だって何通りも試算したし、何言うかも事前に決めてきた。

まずは相手のペースに飲まれず、自分の言うことをぶちまける!!

それに限る!

ので!

「あ、あのー! ハツカですけどー!!」

ドンドンドン

ぜ、

全員外出かよ!

ちよつと待てよ。考えてたシユチユにこんな展開は無い……!

まって、まって! マジでまずいんだけど……!?

と、とりあえずいったん戻って作戦を練り直そう! ここでエンカウントしてしまうのが一番……

「は、ハツカ……!?!」

……。まずい。

つて、言おうとした矢先にこれかよ!?

勇者御一行帰ってきちやっただじゃん!!

どうすんの!?

と、とりあえず!

とりあえず落ち着いて言いたいことだけ言ってしまうおう!!

「…あつ! …あ、あの…:…え、ええと…?」

まあ!

こんな時に台詞が飛ぶのはしょうがないよね!? 畜生!

ど、どうすんのさ!?

「ハツカ!」

「は、はいっ」

ガバツとお辞儀をした。

おお、綺麗なお辞儀。流石勇者…:…じゃなくて!

「さつきは! 我儘言つて悪かった! でも、僕達やっぱり…:…!」

お、おいおい、これって…:…。

「お前との大切なここでの生活の記憶、無くしたくない!」

めっっちゃ恥ずかしいやつだ！

や、やめろよ。家の中ならまだしも今は外なんだ。

よく通ってたからこの家の周りの方々とも顔見知り程度になってるからね！ そんな人たちに見られてハズイ！

ほ、ほらー、今もなんかコソコソ言われてる！

や、やばいよ…！ めっっちゃハズイ！

「僕、ハツカの事今でも仲間だと思ってるし、ハツカの事大好きなんだ
！」

おい、奥様方及び女性陣が顔を赤くしてるからその言い方はマズイ
！ 今すぐ訂正しろ！

しかしそんな熱い勇者のハズイ話を聞けば聞くほど冷静になるも
のでね…。

よ、よーし。落ち着いた。まずは止めよう。恥ずかしすぎる。

「ちよ、あ、ちよっと、あの…一旦、一旦落ち着きませんか？」

畜生！ こんな時に陰キャ病が再発しやがった！

「だからハツカ、頼む！ 僕達から君との思い出を奪わないでくれ！」

話を聞こう、まずはさ。

俺の声がちっちゃかったのは謝るからさ。

あとその言い方やめて？ 俺が悪いやつみたいじゃん…。

いや、魔王軍だったわ。

「僕らにとってはかけがえのない良い思い出だった！ ……君からしたら、違ったのかい？」

わざとか!? わざとやって俺を困らせようとしてるのか!?

それには及ばんぞ！ もう既にかなり困ってるからな！
お願い、とりあえず落ち着いてー!?

「ハツカ…」

ちよ、ちよつと、ミサさんまでそんな涙ぐんだお顔をこつち向けないで？

説明しようとしてるのに聞いてくれないのは君達なんだよ？

「アンタが居なきや居ないで寂しいんだから、居なくなるんじゃないわよ…。アンタだつてアタシ達の仲間なんですよ？」

ツンデレヒロインが惚れた男意外にデレるんじゃないよ！
不覚にもグツてくるもんがあるでしょ！

つて、そうじゃなくて！ 今は話を…

「ハツカさん、私からもお願いです！」

「え…あ、あの…！」

なんだよこの口、壊れてんのか。

「またクッキーも焼きますし！ ……あ、弓も！ 弓も教えてあげま

す！ 私の力はもうないのでお手本はできませんけど、指導ならできますから！」

「う、うん。わかったからさ。一旦、一旦話聞きませんか？」

ダメだこの人たち全然話を聞いてくれない。

な、なんでく…？

「は、ハツカさん！」

「は、はい…。」

「ボク、もう1回よく考えたんだ。ボクにとってハツカさんがどんな人なのか…。」

あ、そういえば俺のこの子気持ち真っ向から否定したんだった？

… ふっ、自分でもわかるくらいヒデーことしたんだな、俺。

「やっぱりね、ボク、君が好きだよ。ハツカさん…。」

「… え、え…っつと…。」

ど、どうしよう…。

こんな時なのに真正面から告られて舞い上がってる自分（バカ）がいる！

前にも言ったけどさ、あの、ホントに勘違いしてしまっんで…。

ていうか君は勇者様のハーレムじゃないのか？

それに…

「え、えっと… あの、俺、蝙蝠なんすけど…。」

「愛に種族は関係無いよ！」

お、良いこと言うね〜！
…
じゃなくて！

何でここだけ会話成立したんだ!?
するならもつと重要なところで…！
いや、これも重要だけどさ！

「だ、だから…その、は、ハツカさん…」
「ね、ねえ… ホントお願い1回落ち着こ？ 俺も言いたいことあつてね？ とりあえず…」
「ハツカ!!」

うわっ!? びっくりした。今宥めてるの見えなかったの？ 順番守ってよ。

「ハツカはオレに師匠じゃない、そう言ったデスね？」
「え、ああ、はい…」

そ、その説も大変ご迷惑を…

「オレが師匠で居続ける限り！ ハツカはオレの弟子デスから！ それに拒否権はないのデス！」

暴君思考じゃん…。
てか師匠、拒否権って言葉知ってたんすね。深い意味は無いっすけど。

てかダメだ。誰も会話のできる状態じゃねえ。

「…」

「あ、あの、もうそのままでもいいん話聞いて貰っても…?」

こうなったら最初っから脚にしがみ付いてきてるユウカにでも…!

「…」

「あの、良いですか? とりあえず一旦…」

「…もりいいー…」

「…」

「…こうもりいいー…」

脚にしがみ付いて泣いていた。
いつかの再放送かよ。

「…こうもりは、はつかじやなきや、やだあ」

「あ、はい」

てか無理じゃんダメじゃんどうすんだよおー。
誰も話聞いてくれないんですけどー…。

——その時、俺は思い出した。

何時か先輩が掛けてくれた言葉を…

『すいませーん、注文いいつす… ツチ! すいませーん! 注文良
いすか! … あー、やっと来た。』

… あ、良いかハツカ。何かあつたらとりあえず大声出しとけ。そ
うすりや大抵どうにでもなる』

って言って次の日大図書館で怒られてたサイジャクさんを…！

そして、今、それを活かし…！

「あ、あの！」

「…え？」

「…なによ」

「…なんでしよう」

「…なに？」

「どうしたんデスか？」

「…」

よ、漸くだ…。漸く皆さま自分の言いたいことが言い終わってスツキリしたのか人の話を聞いてくれるようになった…。

なんだ、最初からこうしてれば良かったのか…。

…いや、何回か大声で呼ばなかった？ 気のせい？

ま、まあいいや。

「…あの、一旦、家入りませんか？ ここだと恥ずかしくて…」

「…あ…」

あ、じゃないんだよ。やっと気づいたんかい。

「…「え…！」「」」

え、じゃないんだよ。近隣住民（オーデイエンス）は散りなさい

よ。

「リリカちゃんとの行方が気になるわ〜」

「わたしは『ゆう×ハツ』が…。」

「違うわよ、『ハツ×ゆう』よ」

「何言ってるんだい、ハツカちゃんにはキキョウちゃんがいるじゃない」

「ちん、そこ〜。うるさいですよ〜。」

早く散りなさい。

「ごめんなさいと…」

外での熱烈なお話が恥ずかしかったのか皆一様に顔を真っ赤に染めて俯いて、ソファーに座っている。

恥ずかしいならやらなきや良かったのに…。

「えっと、皆さん、落ち着いてくれましたか？」

対面に座った俺が聞くと無言で、コクンと仲良く頷く。

よ、良かった。やっと落ち着いてくれたんだね。

「それじゃ、俺からも言うね」

皆だけ言いたいこと言ってずるいからね。俺だって言ってやらー。

「その…ごめんなさいー！」

頭を下げた。

「一方的に色々言っちゃって、皆さんの気持ちも考えず、決まりだなんだと言いついて、話もろくに聞かずに帰ってしまつて…ごめんなさい。」

別れるのが寂しいからってツンケンな態度取つてごめんなさい」

ポロポロと涙が零れる。

今回は作り涙じゃない。本物だ。

さつき注してきた『まるで本物!? 涙目薬(号泣仕様)』は全く関係ない、綺麗な真正銘の涙です。

注した量より多く出て来てるのは予想外だけど…。

「ハツカ…。」

「ハツカ…。」

「ハツカさん…。」

3人がまた涙を出した。

まだ枯れてなかったんすね。

「ハツカ、良かったよ。僕らもう会えないのかと思ったし、嫌われたのかと思ったよ…。」

勇者がそう言ってくれる。

ありがとう。

でもお前に嫌われたとか言われると、さつきの熱烈な告白も相まって、そっちの気があるんじゃないかって誤解しそうになるから気を付けてね。

さつきまで泣いてたはずのミサとシイノもちよつと興味深そうにしてるから。

やめて?!

気を取り直してハルコ、師匠の方を向いて謝る。

「師匠にも、あんな嘘ついてごめんなさい」

「あ……！ う、嘘、だったんデスね……！ ま、まあ、弟子の嘘なんてすぐ見剥けたんデスけどね！」

喋りながらボロボロと涙を流し、ニツ、と笑った。

俯いて固まったままのユウカにも声をかけると、

「ユウカも、ごめんね。他の蝙蝠じゃダつて言ってくれて嬉しかったよ」

「……うん」

顔を上げ、涙を流しながらも笑ってくれた。

「……」

そして誰より、

「リリカ」

「……」

この子だろう。

「怒鳴ったりして……勇気を出して言おうとしてくれた気持ちに対して否定して、ごめんなさい」

「……」

それと、もう一つ。

「どうせ記憶が消えるからってことで、ずっと憧れだったキザキヤラ演じてみて、ごめんなさい」

「…に、似合わなかったよ」

そうかい…。

笑って答えてくれてよかった。

「でも…」

… あ、あれ？ まだなんかあったっけ？

「まだ、許してはないよ？」

「…え？」

え？ な、なんで!?

今の流れるに、みんな許してみんな笑顔、ハッピーエンドのその先へ、つてのをイメージしてただけど!?

「あ、当たり前だよ。ボクは好き、つてこと伝えたのにその返事をもらってないもん…」

… あ、忘れてた。

ど、どうすんだい!? 俺つてば仕事と友達が充実してたから恋愛事情に関してはスツカラカンなんやぜ?

と、とりあえずその場凌ぎの理由でも適当にでっち上げよう！（最低）

「ま、魔素が、魔素が濃いところでは、感情が揺れ動きやすいらしく、自分のホントの感情つてのは見えにくくなるんだってさ」

「… ホントに？」

いや、知らん。

「つてことなんでー、ま、またの機会に…」

「そのまたの機会、が無いんだけどー」

… そ、そうだったよ！

色恋沙汰に現を抜かしてる場合じゃ…！

「そ、そう！ そのことで話が！」

と、とりあえず話を聞いて貰おう。

(あ、逃げた)

(逃げたわね)

(逃げちやダメですよ?)

(ヘタレ、デス)

(…?)

「こらそこー！。なんか聞こえてますぞー！。

☆☆☆

「そー、それで… もっと重要な事、話しても良い？」

皆落ち着いただろうから本題へ入る。

「ハツカさくん？ まだボクの告白の…」

「実は、記憶を消すって件なんだけどー…」

いいやもう、強引にでも聞いて貰おう。

「「「「「…」」」」」

よし聞いているね。

「元の話だと、記憶を消すことができる魔道具があるってことだったんだけど…」

一呼吸おいて。

「それ、無くしちゃったって…」

「「「「「…え？」」」」」

だよね、俺も最初そんな反応だった。

まあ、正確にはこれから無くしちゃうらしいけど…。

そんな反応を見せる勇者たちに、

「そ、それでさ…。今から、直談判しに行かない？」

俺は不敵な笑みを見せた。

「その魔道具が無くなったからどうなるのか、君たち勇者の記憶の命運を決めに」

涙を拭いた一行が顔を見合わせ頷き合う。

仲良いね。

「…それで、どうするっ…」

聞くと、

「当たり前だ、と言わんばかりに再び頷いた。

…
しょうがないな。

「ほら、じゃあ準備して行くよ！」

「わかった！　ところで、行くって何処…」

「直接！　魔王様のところ！」

言うと途端皆が固まり、

「「「「…」」」」
へ？」」」」

そんな間拔けな声を上げて固まった。

「あれ、行かないの？」

魔王までの道

ヨウカに聞かされたのは魔王様と対峙してる勇者御一行と何故か同席してる俺の姿だった。

聞かされた時は何故そうなるのかわからなかったが、成程こんなことがあったのか…。

俺が聞かされたのはその景色だけだけど、どうせあいつのことだ、魔王様にはこれからの事、事細かに報告してんだろな。

「ね、ねえ、ハツカ？」

「んゝ、何ゝ？」

「ハツカはさ、緊張してないの…？？」

魔王様の元へと行く道すがら、おどおど勇者がそんなことを聞いてきた。

「緊張してるよ。見て分らない（ぐううー…）」

お腹が鳴った。

「よし、その前に何か食べよう」

「ねえ、ホントに緊張してる？」

「あ、あそこー！ あそこの屋台が美味しくてね…」

「ねえ、無視しないで？ あとその屋台教えたの僕なんだけど？」

何もそんな緊張しなくていいでしょ。何なら君らの最後の目的だったんでしょ？

☆☆☆

「ずっと思ってたけど、勇者スラッシュってなに？」

屋台でご飯を買って近くのテーブルで食べているときに気になってたことを聞いてみた。

… うん、この『パンで豚の腸詰肉を挟んだやつ』美味しいね。

「… え!? え、あー、あれね? あれはー…」

なんかこいつ、めっちゃ緊張してね?

ガールズもご飯食べずになんか気まずそうって言うか、俯いて顔が強張ってるように見える。

深い意味は無いけど師匠ですら緊張してるとは。

深い意味は無いけど。

皆、ご飯食べないの? お腹空いてないの?

「あの【固有スキル】はね、【勇者】の【称号】を貰った時に同時に会得したものだっただんだ」

「あー、そうなんだー」

モリモリ食べながら話を聞く。

神官であるミサからのお告げを聞いた後、直接国王様との対談をしたそう。

そしてその場でいきなり禊? みたいなことが行われて勇者の称号を得た。

それと同時にトウヤの固有スキルである【勇者スラッシュ】という、

何ともハイセンスなネーミングのスキルを頂けたらしい。

「ま、その勇者スラッシュも今は消えちゃったんだけどね」

ハハハツ…と元氣なく笑う。

た、確かに、固有スキルとか消えたんなら国王様に怒られるのかな？

「…怒られるの？」

食べる手は休まずに聞く。

「え、いや。怒られないと思うけど…？」

怒られないんかい。

じゃあ何でさつきからそんなに元氣ないんだよ。

「いや、僕の、僕だけの技。アイデンティティって考えると特別感が沸いてたからさ…」

「あ、そう」

可哀そうに、こいつも厨二病患者さんだったのか…。

「ま、まあ今はそれよりも…」

勇者はゆつくり城に顔を向ける。
それに釣られて俺も顔を向ける。

「魔王との、『お話し合い』、だからね…」

そんな意味深風に言わなくても…。

話し合いつて言ったって、ただ

「これからどうしますか？」

「よーし、じゃあこうしよう！」

「流石魔王様ー！」

つてなるだけでしょ？

初めてお会いした時のことはあんまり覚えてないからわかんないけど、魔王様つては優しくて剽軽らしいからさ、リラックスしてこようよ。

「そ、そうだ！ 無事帰つてこれたら何処か一緒に出掛けようよ！

ハツカにも僕たちの国を案内したいからさ」

なんだそれ、死亡フラグか？

ダイジョブだって。話してなんかしてすぐ終わりだろうから戦闘に成ったり、死の淵に立たされたりしないって。

「だからさ、ハツカ…。」

…。

「早くそれ食べ終わらないかな!？」

こらこら、食べてる人に急がせるもんじゃありませんよ？

急いで食べたって何も良いこと無いからね？

よく噛んで食べましょうね。

「：． お代わり、しようかな」

「君いつもそんな食べないよね!? 早く行って終わらせようよ〜!」

悪かったわね、食べるの遅くて。

食べ終わる頃には皆シト目だった。

勇者と魔王 1

「… 着いたね」

「や、やつとか…」

どっかの誰かさんのせいで迷子になること計7回、予定していた時間を大きく上回ってしまい、子供たちはもう眠そうですね。

「… ねむい」

「眠いデス」

「眠いなら、寝ても良いよ」

「寝ちやダメなんだよ！ 皆で話を聞くんだよ！」

魔王城、その本殿にして大本命。それが中央。

標高1000m程度の山の上に堂々建つ巨大な、否、巨大すぎる漆黒のお城。

外から見ると常に黒い雷雲が空を包み、時折稲妻が迸っている。

「… いや、なんでさ。」

「この演出要る？ 雰囲気はばっちりだけどさ。」

演出係さん達この前、常にやる必要があるのかね!? って嘆いてたよ。

そんな膨大な城内には様々な施設がある。

魔王様が御られる魔王室、通称魔王の間やその奥にある仮眠室。

その他にも第1から第3までの調理室。

人間の物まで揃えられた大図書館。

何にすればいいのか決められなかったかのように長年埃をかぶっている空き部屋。それが何百部屋とある。

全く持つて土地の無駄遣い、計画性の無さだとは思う。

俺が何度ここで迷子になったことか。

更に今言っちゃうと中央の城下なんかは西支部の比じゃない。

西支部だつて十分な広さで、暮らしや遊び、休日のゆつたりとした生活にびったりな広さをしているつてのに、なんとこの中央の城下、その西支部の城下の約8倍。(推測)

各支部の周りの住宅発展が街レベルだとしたら、魔王城の周りは国レベルに発展している。

それが広いのなんの。何回か行ったことはあるんだけど、気付いたら元居た位置に戻つてくるが多々あったよ。

そして話は城内に戻る。

外も広けりや中も広いこのお城。

西支部から、各所に渡れる装置『わーぷぞーん』を使用して勇者たちと飛んできたのだが、そこからの道のりが険しかった…。

行き先々に現れる分かれ道や十字路^{クロスロード}、クロスロードつてカツコいって思つた俺と疲れてきた勇者、何回かの道間違いは許してくれる彼らと申し訳ない俺、4回目以降はなんかピリピリしてくる空気と焦る俺、疲れたから蝙蝠で運んでもらつてる俺とそれを運ぶ幼女^{ユウカ}。

そんなこんななの紆余曲折があつて、

遂に辿り着いた…！

「あの、すみません。魔王様のところに行きたいんですけど…」

へと！

「ああ、それでしたら『わーぷぞーん』の元へ行つていただき…」
「ほほう」

「ねえハツカ、そこつて最初の所だよね…？」

勇者、今はしーっだよ？ 係りのお姉さんの話聞いているからね？

「おっけ、お待たせ。完全に理解したわ」

「すみません、お姉さん。僕にも教えて貰つていいですか」

おいこら勇者、それじゃあまるで俺が信用できないみたいじゃないか。

☆☆☆

暗く長く、先の見えない廊下がある。

「「「おお」」」

そこを通ると火が勝手に灯る謎の蠟燭が大量に配置されている。

その長い長い廊下を抜けると魔王の間がある。

うわあ、久しぶりにここ来たけど、演出すごいなあ。

… っでことで我ら、

「… 着いたね」

「や、やっとか…」

やっど着いたぜ！

「それじゃあ早速入ろうか」

「まって」

どうしたトウヤ、緊張してきたか？

「僕、ホントにあのお姉さんに道聞いて正解だったよ」

「… ？ そうなんだ？」

俺がそう言うどガツクリと倒れてしまう。

な、なんだよ、どうした。言いたいことがあるならハッキリ言った方が良いぞ？

勇者は暫くミサとシイノさんに宥められてると立ち上がった。

「… トウヤさん、どうしたんだろ」

「ハツカさん。今度、地図の見方教えてあげるね？」

なんかリリカにそんなこと言われた。

それも少し、可哀そうな人を見るような目で…。

勇者は立ち直ったみたいだからそろそろ行こうか。

俺はちよつと落ち込んでるけど。

「まあ、些細な問題だ。」

「… それじゃ、行くよ」

「え、何？ さっきまでお気楽だった人が急に重苦しい空気出すと本気でビビるんだけど…？」

何を言ってるんだこの勇者は。

「え、だから俺もずっと緊張してるって言ってたじゃん」

「本当にそうだったんだ!? 感情隠しすぎじゃない!？」

「… 隠すのは、上手いからね（どやっ）」

「隠れるのは下手だったみたいだけど…？」

五月蠅いですね。

行きますよ？

「さ、行くよ？」

「ま、まって？ ホントに待って？ まだ心の準備が…」

コンコンコン

「お忙しいところすみません。トオカカン、ハツカです。勇者とその一行を連れてきました」

「ハツカ君？ 僕、本当に君が友達なのか考え直す必要があるかもしれないよ」

「あ、ごめん。俺も緊張してて…」

『… ハツカか』

言い訳しようと思ったら中から声が聞こえてきた。

『わかった、入れ』

「は、はい」

「言われ、重い扉を開け」

「…おつも、ごめ、トウヤ。手伝って…？」

「重くて開きませんわ。」

勇者と魔王 2

「突然の来訪すみません、どうしても話を聞いてほしくて…」
「よい、ここに来ることは聞いていたからな」

さっすがヨウカさん！

「遅刻してくるのも聞いていたぞ」

だってさ勇者、ほら謝れよ。

チラツと意味は無いけど勇者を見ると、な、なんか、すっごい睨ま
れてる…。

「はい、誰とは言いませんが道に迷ったものがいましたので…」

嘘は言っていない。迷ったのは俺なんだから。ああそうなんだ。

扉を（トウヤが）開けると、そこに居らしたのは変わらぬ様子で鎮
座している魔王様だった。

や、やっぱ生で見ると迫力すっごいなー…。

「一応話には聞いているが、何の用か。聞いておこう」

「あ、はい」

緊張して喉とかカラカラだよお…。

「あの、勇者たちなんですけど…」

西支部での戦いの末、サイジヤクさんが勇者たちを捕らえ、しばらくの間西支部で生活をしたことによつて力が完全に抜けきつたことを説明した。

「そうか、監視役、ご苦勞だったな」

「い、いえいえ、自分も言っちゃアレですけど、楽しかったので」「そうか」

(それ、言っちゃつて良いんだ…)

勇者、ホントに今はしーっ、だよ。

そういえば最近何気ない心の声も聞こえるような気がする。
熟練度的なあれかな。
今度検証しないと。

「それで、あの…勇者たちの力が抜けきつたら記憶を消すつて言われてたんですけどー…」

(あ、やっべ…)

…？ 今なんか聞こえた？

「…勇者に問う」

「は、はい！」

なんか魔王様少し慌ててる？
いや、気のせいかな。

「力を、失つたようだな…」

「それは、もう完全に」

…今思った。俺、力のない勇者よりも力がないらしい。

「また、力をつけ我に挑む気は」

「無くなりました。今、完全に」

今迄は少し狙ってたのかい。

「ほう…」

「そもそも四天王サイジャクに負けた時点でもう勇者としての道を諦めていました」

そ、そうだったんだ。

「でもそこに、一時期は旅を共にした（少し変わった）蝙蝠ハツカが来てくれて」

懐かしいな、トウヤとの旅。

今思えば少しは楽し…ん？ 気のせい？ なんか小言挟んでない？

「思っていたよりも短い間でしたけどハツカとの日常（は少しめんどくさい時もあったけど）、そこでの生活は思っていたよりも楽しく」

はいー、今のは聞いたよー。なんか言ってるなあ。おい。

「そして今、全盛期であろうと、そこからいくら力を付けようと乗り越えられない壁を知って完全に気は失せました」

「そうか」

魔王様は一息置くと、

「勇者」
トウヤ

「はい」

「好きにしろ」

お、おや？

「国へ戻るなり、ここまでの順路を教えるなり、住民の弱点を教えるなり、（あの）国王に伝えるなり好きにしろ」

ま、魔王様…？　そ、そんなに言つて、大丈夫なんすか？

「お前に出来るなら、だがな」

「出来ません、いえ、しませんよ」

「魔王である我が、力を失ったとはいえ仮にも勇者の話信じるなど酔狂な話だが、相分かった」

な、なんだこの2人の空気…。

「もしも、の場合はそこの首でも…」

はは、ウケる。勇者たちの巻き添え食らつてんじやん、その蝙蝠とか言うざk…。あ、はい俺ですね。

「ご安心を。友の命は必ず、僕が守つて見せる」

か、かっけー…。こりや女の5人や6人惚れるよな。

「そうか」

口数少なく決まるのってなんかカツコいいな。
なんて暢気に考えていると、

「それと…ハツカ」

「は、はい」

やっべ、完全に氣い抜いてた。

「今代の勇者の監視任務ご苦労だった」

「い、いえいえ」

「『偵察』任務が、『潜入』任務に変更があつたようだが、任務ご苦労だった」

「ひゃ、ひゃい…」

お、おこつちえるおー…

嫌味か…!? 嫌味なのか?!

「次も頼むぞ、『偵察』を…」

「……………はい（超小声）」

そこから勇者宅までのことは、あんま憶えていない。

☆☆☆

「ま、魔王、さんつてやっぱり威圧と言うか貫禄がなんか、凄かったね…。うちの国王様とは違って…」

「逆にどんな国王なんだよ…」

勇者宅に戻つて暫く、皆漸く緊張が解けてきたのか寝る者や、ソ

フアーにグダる者が出てきた深夜の刻。

とりあえず疲れただろうから詳しい話は明日ね、ってことではいい、
解散。

ってなったけど、気になってお昼寝もできる自信が無いから、疲れたであろう身体に鞭打ってもらってトウヤさんとお話ししてた。

「まさかホントにあんなアツサリ決まるなんてね」

「あれをアツサリって言える勇者のハートは強いっすよ」

ケラケラ楽しそうに笑う勇者だが、

「…で、どうすんの。ホントに」

なんて声を掛ければその笑みもピタリと止んでしまう。

「こ、このままここで生活をく…」

「なくんてのは無理ってわかってるでしょ？」

多分サイジヤクさん達から嫌がらせされるよ？

「…一旦ね、国に戻ろうかと思うんだ」

「国王さんのところ？」

「うん、そこで『負けました！ 勇者、やめます！』って言うって、
かな」

「それ、怒られないの…？」

「怒られはしないよ、元々断つてもいい話だったし…」

「え、そうなの？」

マジで謎だな、その国王。

「うん、勇者の素質があるって言われても僕の他にも適正は低くても十分勇者やれる人はいっぱいいたみたいだし…。」

なんか良くわかんなくなってきたな、勇者事情。

「死ななければ何でも良い、って感じだったからね。」

再びケラケラ笑う。

「そうなんだ…。」

「あ、それでさ、ハツカ」

見ると、とても楽しそうな顔で、

「ハツカも、来てみる？」

そんなこと言いやがった。

☆☆☆

——訪問者が退室した魔王の間。

その部屋どころかその城の主である、かの魔王は…

「よし、楽しく話せたな！」

かなり、コミュ障だった。